ISSN　0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第116号

船井郡京丹波町三ノ宮東城跡の発掘調査----------引原茂治------- 1
共同研究　弥生中期の交易拠点における
遠隔地地域間交流の一例---------- 高野陽子・田代　弘------- 5
恭仁京造営史（下）----------伊野近富-------15
人面付き土器の系譜（下）----------岩松　保-------23
平成23年度発掘調査略報----------31
１．長岡京跡右京第1023次・松田遺跡
２．興戸遺跡第17次
３．椿井遺跡第５次
４．長岡京跡右京第1026次・松田遺跡
発掘余話第５回　苦難を乗り越えた先祖たち----------36
トピックス　仲ノ段遺跡の縄文土器----------柴　暁彦-------40
研究ノート　桂川右岸地域における古墳時代集落の動向（１）----------古川　匠-------42
長岡京跡調査だより・112----------46
普及啓発事業----------48
センターの動向----------50

2011年12月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

船井郡京丹波町三ノ宮東城跡の発掘調査

引原茂治

１．はじめに

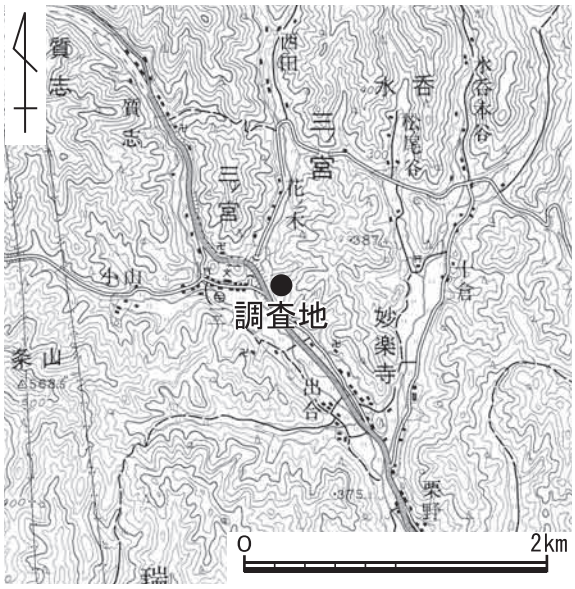
三ノ宮東城跡は、京都府船井郡京丹波町三ノ宮花ノ木に所在する。京都府のほぼ中心部、京丹波町の西側、旧瑞穂町の山地内の丘陵先端部に位置する。城跡の西側300ｍの地点には、土佐藩祖山内一豊の祖父久豊に関係するという地元の伝承をもつ三ノ宮西城跡がある。また、三ノ宮西城跡の西側山腹には、丹波地域では数少ない古墳時代の横穴の一つである三ノ宮校裏山横穴がある。さらにその西側には式内社の酒治志神社が鎮座する。今回の調査は、丹波綾部道路建設事業に伴うものである。

三ノ宮東城跡は、室町時代後期の戦国時代の城跡と考えられている。この城跡は、北から南側に延びる丘陵先端の頂部に中心となる曲輪を置く。さらに、尾根の稜線に沿って南側に半円形の曲輪を２か所設け、西側の山腹には細長い曲輪を３段に造成する。北側は、３条の堀切で丘陵の稜線を断ち切り、土塁を築いて防御している。

城跡の麓では、西丹波・摂津方面から谷筋を北上してきた道が、福知山を経由して山陰方面へ通じる道、綾部を経由して丹後方面へ通じる道、和知を経由して若狭方面へ通じる道に分岐する。交通の要衝に位置する城跡と言える。

２．調査の成果

城の中心となる曲輪１では、礎石建物跡１～３や貯蔵穴、塀跡とみられる石列などを検出した。また、中国製や国産の陶磁器などとともに、甲冑金具などが出土した。礎石建物跡１は、４間×４間の建物で、柱の間隔は２ｍを測り、全体として一辺８ｍの正方形の建物になる。この城の中心的な建物とみられる。建物の北東辺中央部には弧状の石列があり、竈の基礎とも考えられる。南東辺の外側にも１間分の直線的な石列があり、目隠し塀のような施設があったことも想定される。礎石建物跡２は、２間×３間の建物で、曲輪南端にあり、隅櫓的な建物と考えられる。建物の西側基礎部分に貼石状の石積がある。また、この建物の西が曲輪１への虎口となるが、その部分にも礎石とみられる石があり、あるいは門があった可能性も考えられる。礎石建物跡３は、礎石の残存状態が悪く、規模や形状は不



第１図　調査地位置図　（国土地理院 1/50,000 綾部）

Y=-59, 600
Y=-59, 580
Y=-59, 560
Y=-59, 540
Y=-59, 620
X=-86, 600
X=-86, 620
X=-86, 640
X=-86, 660
X=-86, 680
X=-86, 700
X=-86, 720
X=-86, 740
250
260
270
280
曲輪1
曲輪2
曲輪3
曲輪4
曲輪5
曲輪6
小曲輪
小曲輪
排水溝
排水溝
排水溝
排水溝
貯蔵穴
貯蔵穴
礎石建物跡1
礎石建物跡2
礎石建物跡3
礎石建物跡5
石積
石積
石積
石積
石段
石列
竪堀
竪堀
竪堀
柱穴
土塁
土塁
土塁
堀切
調査範囲
0
10
20
30
40m

第２図　調査地平面図

明である。残存する礎石の配置状況から、仮に、２間×５間に１間×２間の張出部が付属する建物とみておきたい。曲輪北東側では、堀切側に延びる通路を検出した。斜面側を石積で護岸し、途中に石段を設ける。堀切を通じて谷部から水を汲み上げるための通路、あるいは、非常時の脱出用通路とみられる。その南側に隣接して竪堀が１条ある。この通路から礎石建物跡２までの曲輪１南東辺に、断続的に延びる石列を検出した。塀などの基礎部分と考えられる。貯蔵穴は、地山の岩盤を掘り込み、その縁辺に石積を設ける。周辺に礎石状の石が散在しており、覆屋があったことも想定できる。

写真１　城跡調査前全景（北西から）

曲輪２では、２間×４間の礎石建物跡５や貯蔵穴などを検出した。貯蔵穴は、曲輪１のものと同様である。また、この曲輪は周囲の斜面部に６条の竪堀が設けられている。竪堀の中には、底部が非常に狭くなった断面「V」字形を呈するものもある。なお、この曲輪では、曲輪１と同様に、南東辺に石列があり、塀などの基礎と考えられる。あまり広い曲輪ではないが、中国製磁器や古銭なども出土しており、曲輪１同様に、城内でも重要な地点であったと考えられる。

曲輪３～５は山腹に造られた細長い曲輪である。曲輪の斜面裾部は地山の岩盤を削り出した急傾斜の切岸となる。各曲輪に礎石状の石が残っており、礎石建物があった可能性も考えられる。また各曲輪の斜面裾には、岩盤を掘り込んだ排水溝がある。曲輪３では、南端の通路際に石積を築いて護岸している。曲輪４では、北端部を２段の低い段状に成形している。曲輪５では、南側の斜面裾に、岩盤を掘り込んだ柱穴がある。対になる柱穴は検出できていないが、掘立柱建物があったとも考えられる。また、この曲輪には調査前に土塁状の盛り上がりが見られたが、調査の結果、曲輪４の縁辺中央部が崩落して堆積したものであることを確認した。崩落土の除去後に梯子形の浅い溝状遺構を検出したが、その性格は不明である。また、この曲輪の北端部が、麓から城内への入り口になると考えられる。麓までの通路については、調査地外となるため、不明である。曲輪３および曲輪４の北側部分では、下部の曲輪の北端部に張り出すような小曲輪を設けている。下部の曲輪に侵入した敵に横矢を掛けるための施設とも考えられる。

曲輪６は、曲輪２から続く竪堀を設けた斜面の裾部が、地山の岩盤を削り出した急傾斜の切岸となる。礎石状の石列が残っており、礎石建物があった可能性がある。この曲輪から石仏が１体出土した。尖頭板碑形で阿弥陀如来を浮き彫りする。戦国時代以降の城では石仏や石塔を石材として使用することがあるが、この石仏が石材として持ち込まれたものかどうかは不明である。

各曲輪はジグザグ状の通路でつながっている様子である。この通路では斜面裾に地山の岩盤を

写真２　城跡遠景（南から）

写真３　曲輪３南端石積（北東から）

掘り込んだ排水溝を持つ部分がある。曲輪３から曲輪４に到る通路の屈曲部では、斜面裾に石積の一部が残存する。また、曲輪４から曲輪６方向への通路には柵列状のピットが並ぶ。

３．まとめ

三ノ宮東城跡は、出土した陶磁器や土器などから、室町時代後期の16世紀前半頃の城跡と考えられる。この城跡では、塀を設け、斜面部に竪堀を掘り、地山の岩盤を削り込んで急斜面の切岸を造り出すなど、様々に防御のための工夫がされていることを確認した。また、建物基礎や通路の要所に石積を築き、岩盤を削り出して各曲輪を整形するなど、丁寧な城造りの様子がうかがえる。

それとともに、城内に礎石建物があったことを確認した。簡素な掘立柱建物がわずかにあるのみで非常時だけに使用されたとみられる一般的な戦国時代の山城と較べると、恒久的な造作である。また、各曲輪からは、中国製や国産の陶磁器が多数出土している。このような状況から、この城は、非常時だけに使用されたのではなく、ある程度日常に近い生活が行われていた可能性も考えられる。平地からの比高も50m前後であり、あまり高いとは言えない。

三ノ宮東城跡はあまり規模の大きい城跡とはいえないが、ほぼ全域にわたって、戦国時代の城の状況を知ることができた。これが、今回の調査の大きな成果と言える。

上記のとおり、この城跡に隣接して三ノ宮西城跡がある。この城跡は、調査が行われておらず詳しいことは不明であるが、同時期の城と仮定すると、その近さから敵対する城とは考えられない。三ノ宮東城跡からは南側の谷筋を眺望できないが、三ノ宮西城跡からはできる。このように考えると、この２つの城は一組で機能していた可能性も考えられる。また、時期差があれば、移転したとも考えられる。その場合、三ノ宮東城跡から、山内氏の城という伝承が残り館跡と考えられる部分が付属する三ノ宮西城跡へ移転した可能性が高いと思われる。これにより、三ノ宮西城跡は長く地元の人々の記憶に残り、三ノ宮東城跡は忘れ去られたとも言えよう。京丹波町の瑞穂地域には今も山内姓を名乗る人が多く、土佐山内氏との関わりは別として、三ノ宮西城跡が伝承のように山内氏関係の城跡である可能性は充分考えられる。隣接する三ノ宮東城跡も、並存でも移転であっても、山内氏関連の城跡と考えることもできる。

（ひきはら・しげはる＝当調査研究センター調査第２課第１係主任調査員）

共同研究

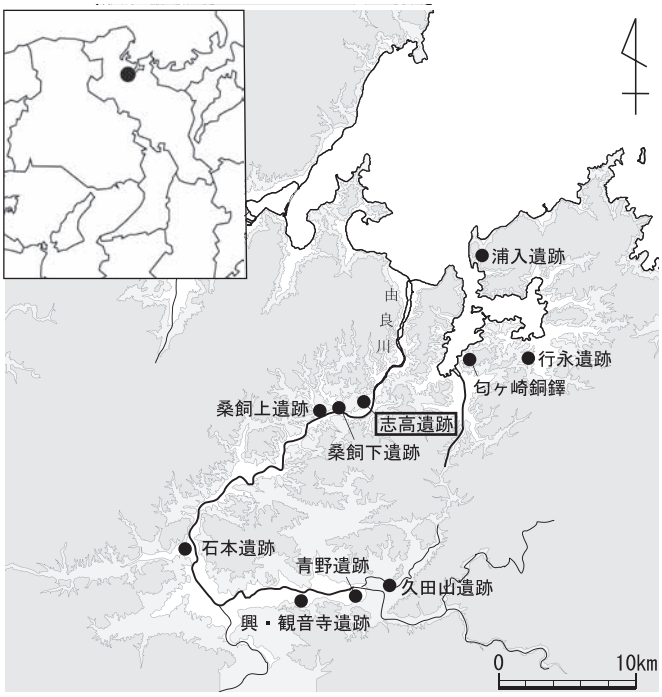
弥生中期の交易拠点における遠隔地地域間交流の一例
―舞鶴市志高遺跡にみるキイロダカラを納めた「双耳壺」の評価―

高野陽子・田代　弘

1．志高遺跡の位置

京都府舞鶴市志高遺跡は、京都府北部最大の河川である由良川の河口を約１km遡った中流域に位置する遺跡である。遺跡は山間部が迫る谷あいの地にあり、由良川左岸の自然堤防上に立地する（第１図）。これまで舞鶴市教育委員会・当調査研究センターによって発掘調査が実施され、縄文時代前期に始まり、弥生時代、古墳時代、奈良時代の各時代に展開する大規模な複合遺跡であることが判明している。なかでも弥生時代の集落形成は顕著であり、前期中葉に端緒がみえ、河川の氾濫による埋没を繰り返しながらも中期には大きく拡大しており、竪穴式住居群とともに大規模な方形周溝墓群や貼石墓などが検出された[注1]。集落域と墓域との関係を知ることができる近畿北部有数の弥生遺跡であるが、近年さらに遺跡の再評価により、由良川に面して構築された船着き場跡とみられる長さ50mに及ぶ多量の礫を伴う堤防状の遺構の存在が明らかになった[注2]。こうしたことから、志高遺跡は古代の港として、日本海域と内陸側、ひいては太平洋側の諸地域を結ぶ大規模な交流拠点であったと推定される。

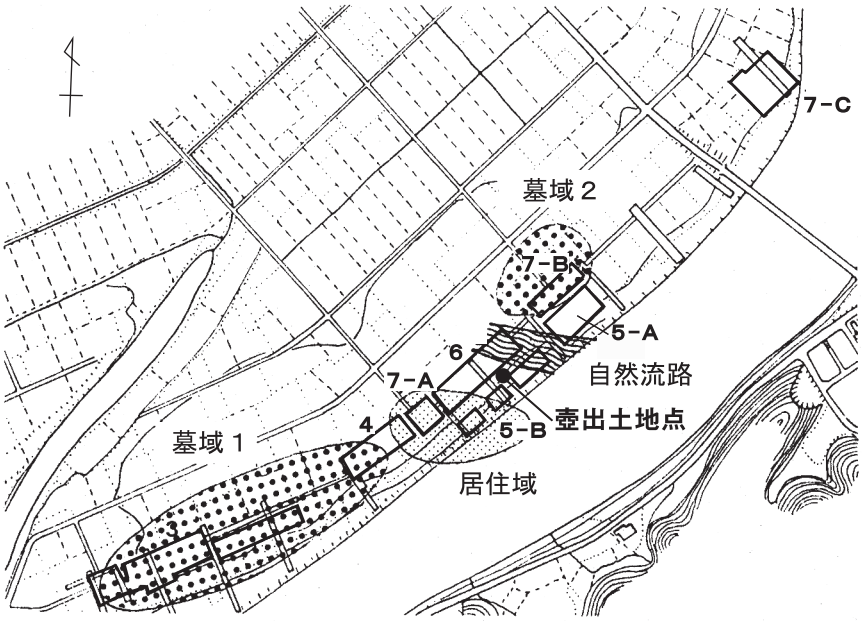
今回の共同研究は『京都府における弥生土器集成』をテーマとし、その成果報告の一環として志高遺跡で1986年の秋に発見された弥生時代中期の双把手をもつ広口壺と中に収納された貝資料を紹介する。



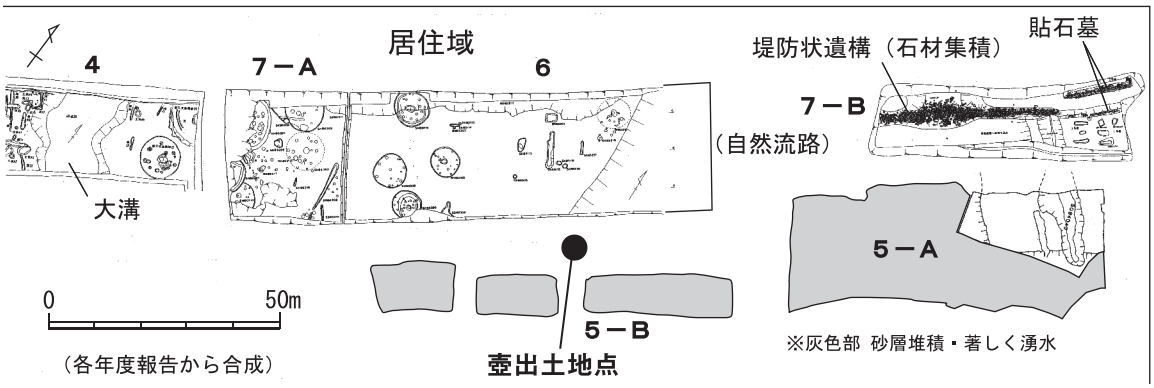
第１図　志高遺跡の位置

2．広口壺の出土地点

貝を収納した広口壺は、当調査研究センターによる昭和59年度調査地と昭和61年度調査地の間に位置する調査対象地外の地点で、発掘調査終了後に工事用重機による掘削の際、不時発見されたものである。発掘調査による出土品ではないため、これまで写真等が公開されているにとどまり、今回、共同研究の一環として、舞鶴市教育委員会の了解のもと、熟覧と図化作業を行った。



（志高遺跡報告書より引用、一部加筆）



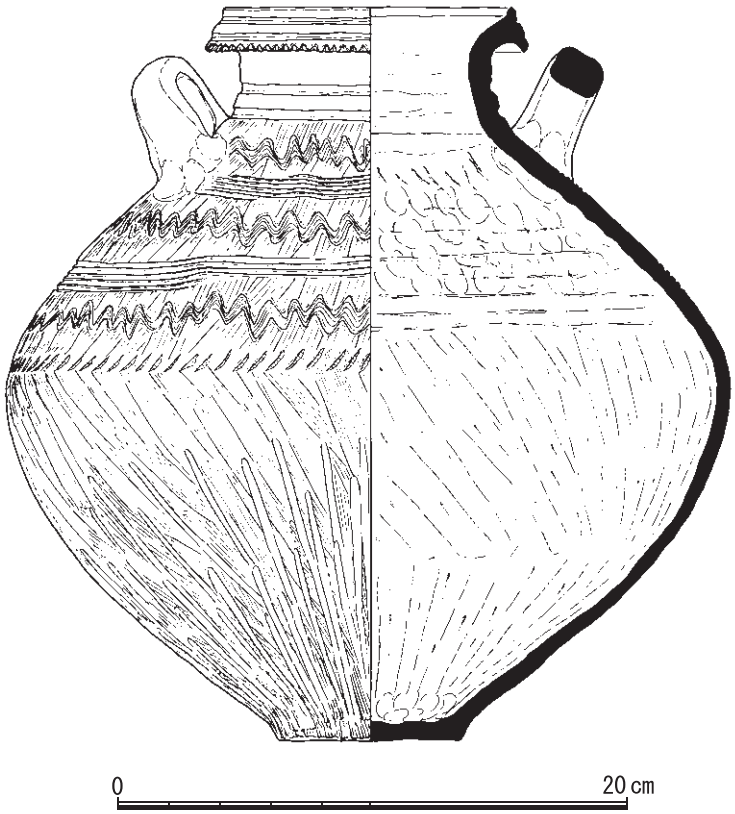
第２図　志高遺跡「双耳壺」の出土地点

出土地点は、第２図に示すとおり、昭和61年度（第６次調査）に竪穴式住居跡群が検出された居住区エリアの南側の地点である。壺出土地点の南側の昭和59年度（第５次調査）調査区の５－Ａ・５－Ｂは、湧水と壁の崩落が著しく下層調査は不可能とされた地点であり、壺が出土した中間地は、旧河道の一部に含まれると考えられていた。しかしながら、今回出土した壺は内部にタカラガイが遺存した状態であり、器壁も磨滅していないことから、正位置を保ち発見され、原位置からほとんど移動していないとみられる。このことから旧河道のラインはやや東にあり、壺は地中に埋納されていた可能性が高い。壺が発見された地点の北東には、貼石墓や船の着岸のための堤防状の遺構が検出された７－Ｂ区があり、壺の発見地点との約60mの間には、北西から南東へと流れる由良川本流に合流する旧河道が存在したと復原されている。したがって壺の出土地点は、集落のなかでも下流側にあたる居住域の東端に位置することになり、由良川の河岸に近く、船着場とされる集石を伴う堤防状遺構とも約50mと近い距離にあり、まさに集落の入口部にあたる場所に埋納されていたと考えられる。

３．広口壺の形態と特徴

発見された広口壺の形態と特徴をみておきたい。壺は、口縁部が直立気味に立ち上がり、端部が短く外反して上下に拡張するもので、体部最大径を中位にもち、大きく張り出した胴部を特色とする。口径11.3cm、器高28.7cmを測り、体部最大径は28.4cm、底部径7.3cmを測る。両肩部に一対の把手をもつ、いわゆる双耳壺である。

各部位について詳述すると、口縁部は端面に２条の丁寧な凹線文Ａ種が施され、口縁端面の下端にキザミが連続して施され、頸部には２条の凹線文Ｂ種が施されている。体部は、外面上半に粗いハケが施されるが、下半部では原体を替え、細かいハケ工具によって下から上方向に調整される。体部外面は、上半に櫛描波状文と同直線文が交互に施文され、体部最大径となるその下位に櫛描列点文が施される。体部下半には、粗いミガキが放射状に確認できる。体部内面下半は、下から上方向のケズリによって仕上げられているが､底部から一気にケズリ上げたものではなく、方向を異にする２段階のケズリ痕をみることができる。体部上半にはユビオサエによる指頭圧痕が特徴的にみられ、調整・施文時の器体支持の際に生じたものか、横方向の沈線状の工具跡が途切れつつ部分的に認められる。底部は外面にハケ、内面には指頭圧痕がみられる。また、底部内面から約４～５cmほどの高さまでに、風化して白く変色した貝殻の一部が粉状に付着し、体部内面の最大径付近にも同じく、ごく微量であるが粉状になった微細な貝片が認められる。焼成は良好であり、色調は明黄褐色（10YR7/6）～黄橙褐色（10YR7/8）を呈する。胎土は極めて精良で、大粒の岩石粒はほとんど目立たず、１mm前後の微細な砂粒を多量に混和材として用いているようである。肉眼観察でわずかに石英・長石のほか、堆積岩類、赤色斑粒が一部確認できる。こうした砂粒構成は古成層（丹波帯）にある由良川流域でもみられるものだが、極めて微細な砂粒を混和する胎土の特徴は基本的に在地土器にはみられないものであり、色調等からも搬入品の可能性が高いものと推定する。



第３図 「双耳壺」実測図

壺の帰属時期を当地域の概期の弥生土器編年に照らして検討しておきたい。北丹波地域では、1980年代後半の近畿舞鶴道関係工事に伴う調査による急激な資料の増加を背景に、京都府弥生土器集成[注3]や舞鶴市志高遺跡[注4]における編年的検討が進み大きく進展した。『集成』

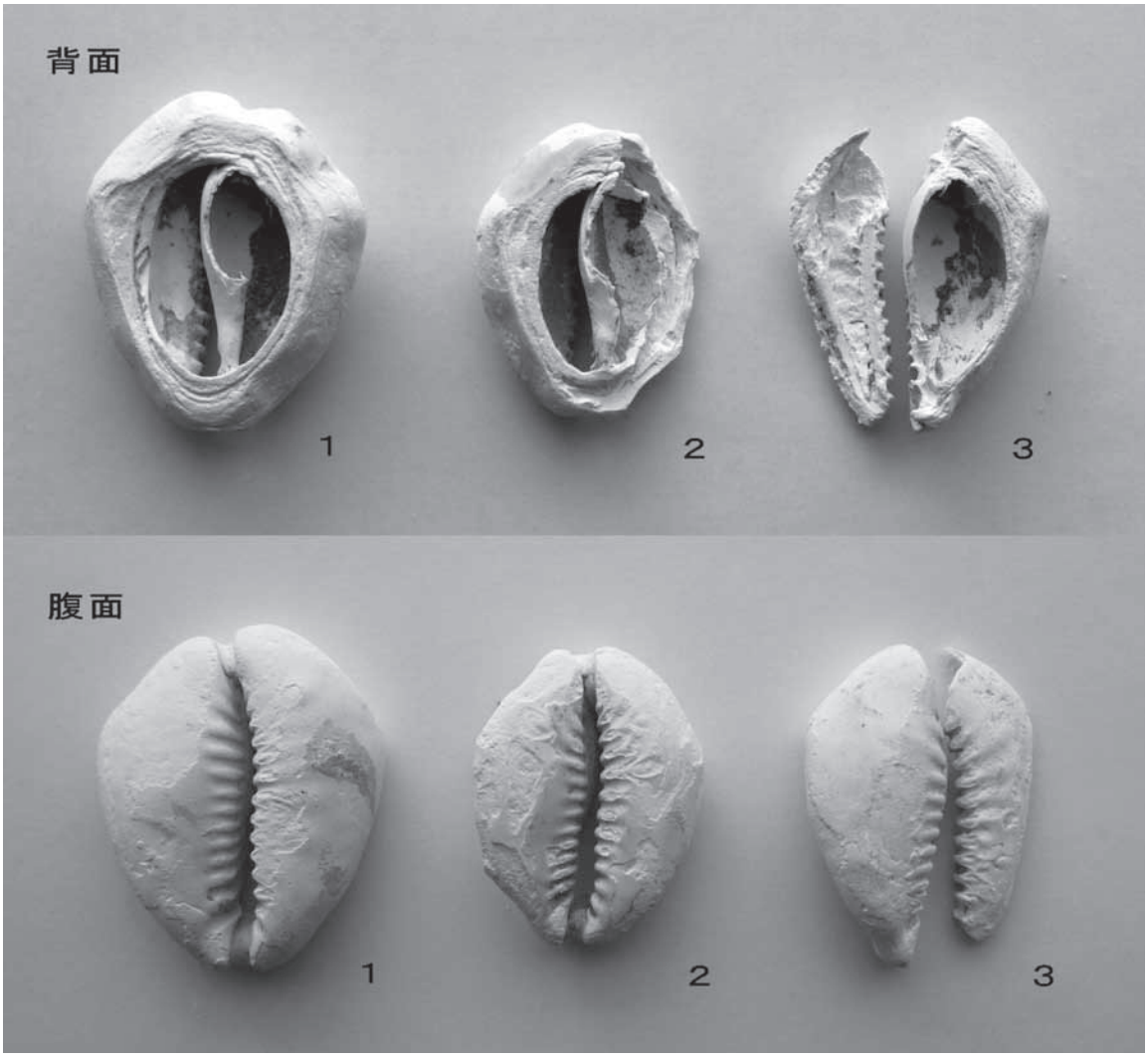
第４図　志高遺跡出土の「双耳壺」

では、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に相当する土器相を４期に、志高報告では志高弥生Ⅲ～Ⅵとして４期にわける編年案が示されている。その後、福知山市興遺跡の報告をはじめとして中期土器の編年作業を田代弘が検討し、凹線文出現以前のⅢ様式の新古を明らかにするとともに、凹線文の採用から衰退に至るⅣ様式の土器相を周辺地域の様相からⅣ－１様式を想定した上で３期に細分し、中期中葉から後葉に至る基本的な編年の枠組みを示した。(注5)

今回出土した壺は、不時発見による単体の発見であり共伴資料はなく、型式学的な特徴から帰属時期を検討しておきたい。まず、広口壺は口頸部の立ち上がりが短いタイプで、口縁部が短く屈曲し、端部が肥厚して上下に拡張することを特徴とすることから、中期後半の瀬戸内地域を本源地とする壺の系統にあるものとみることができる。壺の口頸部にみられる凹線文の組み合わせは、しばしば編年の指標とされてきたものだが、今回の資料は、口縁部と頸部に施文された凹線文の組み合わせを特徴とし、口縁端面にいわゆる凹線文Ａ種を施す。同種の広口壺が系統的にみられる瀬戸内地域を例にとると、播磨では中期後半の属性変化について（１）「口縁部櫛描文＋頸部突帯文」（篠宮編年Ⅲ－２）→（２）「口縁部凹線文＋頸部突帯文」（同Ⅳ－１）→（３）「口縁部凹線文＋頸部凹線文」（同Ⅳ－２）という段階的な変化が指摘されている。(注6) 口縁部・頸部ともに凹線文を施す（篠宮編年Ⅳ－２）の段階は、北丹波編年Ⅳ－２・３期に対応する。田代はこれを凹線文の盛行期（Ⅳ－２）、同衰退期（Ⅳ－３）としたうえで、Ⅳ－３期の特色を凹線文の小条化や明瞭に屈曲する口縁をあげており、今回の広口壺は、さらに頸部凹線文が２条と小条化し、沈線状を呈していることから、北丹波編年Ⅳ－３期のなかでも新しい様相とみることができる。再検討された播磨編年では、東播磨、西播磨ともに、口縁部・頸部に凹線文を施す段階はⅣ－３・Ⅳ－４段階に対応する。(注7)

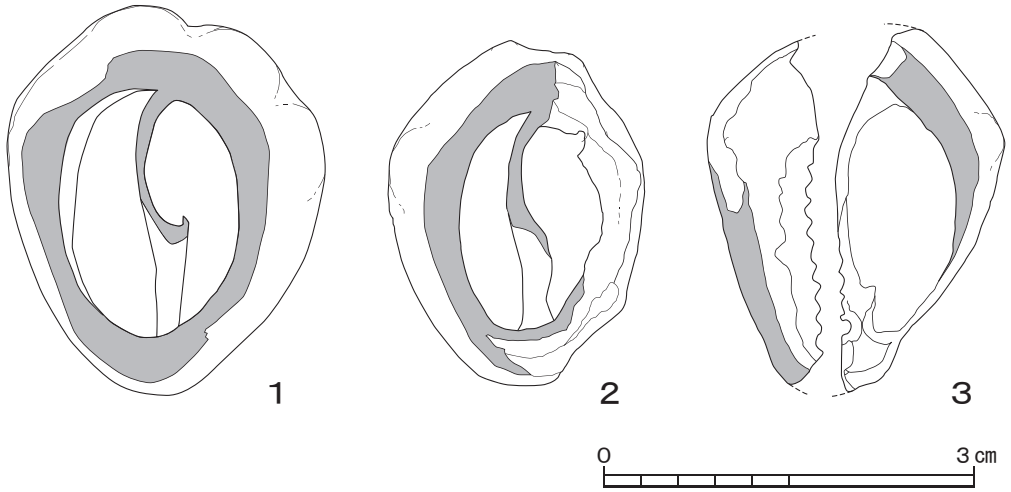
４．壺に納められたキイロダカラの特色

タカラガイは、先に述べた通り弥生時代中期の壺の中に収納された状態で発見されたものである。舞鶴市教育委員会の聞き取り調査によると、発見当時、壺には水が溜まり、その中に相当量



第５図 「双耳壺」に納められていたキイロダカラ

背面実測図



第６図　キイロダカラ実測図

の貝が土と混じりあって入っていたとのことであり、貝の量は多かったようだが、総量については確定することができない。以下には、現存する３個体について観察し、現状を記すことにしたい。

各個体の名称については、便宜的に、第５図に図示したように、左から、資料１、資料２、資料３と名付けた。なお、資料は、風化による劣化が顕著であり、触れることが出来なかったので、殻高、重量の計測は行わずに、殻長と殻幅の上面観の計測にとどめた。

資料１　殻高約3.0cm、殻幅約2.4cmを測る。内唇縁の上端が直線的に伸び、ブーメラン状に屈曲した弧を描く。外唇縁上端も内唇縁ほどではないが直線的であり、加えて瘤状の凹凸が認められる。背面側は、背面縁以上が失われている。欠失部位をよく見ると、第６図に網点で記した部位に、平滑で水平な面が形成されていることがわかる。わずかに擦痕も認められることから、人為的に切除された痕跡である可能性を考える必要がある。風化による自然崩壊とする意見には賛同し難い。

資料２　殻長約2.6cm、殻幅約2.0cmを測る。内唇縁が上端から半ばにかけて欠損しているため、内唇縁上端の形状は不明である。外唇縁状端は直線的であり、側縁に瘤状の膨らみが認められる。資料１と同様の形状を持つ個体と推測することができる。背面は、資料１と同様の状態である。

資料３　破損して、二つの破片となって残っている。上端、下端が失われているが、およその法量を推測できる。殻長は約３cm前後、殻幅は２cm以上であろう。内唇縁、外唇縁の形状、外観は、資料１と等しい。背面は、資料１、資料２と同様の形状である。

以上が、各個体についての観察所見である。次に、当該資料の有する問題点、意義等について記し、まとめとしたい。

まず、この貝の種類についてであるが、いわゆるタカラガイに属するものであることは疑いない。タカラガイの中でも、背面縁が幅広く背面が突出すること、矩形の平面形を有することから、下記のキイロダカラ（Cypraea moneta Linnaeus）と考えられる。[注8] 本来、黄色い光沢のある殻を有するが、当該資料は風化による白化作用により、色調は失われている。

キイロダカラは、殻高が１～２cmの小型種とされている。殻の側縁は、大きく横に張り出し、背面中央部が盛り上がるという形態的特徴がある。色調は、ほぼ一様に黄色であり、殻口の周辺だけ淡く薄い。生息域は、本州南部以南の岩礁の潮間帯のごく浅い場所に生息するという。[注9]

当該資料は、キイロダカラの特徴に合致するが、殻高は不明というものの、殻長約３cm前後を測り、一般的に見られる個体に比べて大形品の部類に入るといえる。

今回の検討で、当該資料は、背面縁を境にして背面を除去した加工品である可能性が高まった。キイロダカラは、他のタカラガイと異なり、背面縁と呼ばれる背面と縁との境界部分に明瞭な屈曲部があり、背面縁は幅広い面を形成する。当資料は、この背面縁の面を残し、背面の突起部分だけを切除したものとみることができる。つまり、キイロダカラは、この背面縁の形態的独自性から、加工原料として、あまたあるタカラガイの中から選択された可能性も考えられるのである。

キイロダカラの背面を、当該資料のように切除加工して使用した事例として著名なものに、古

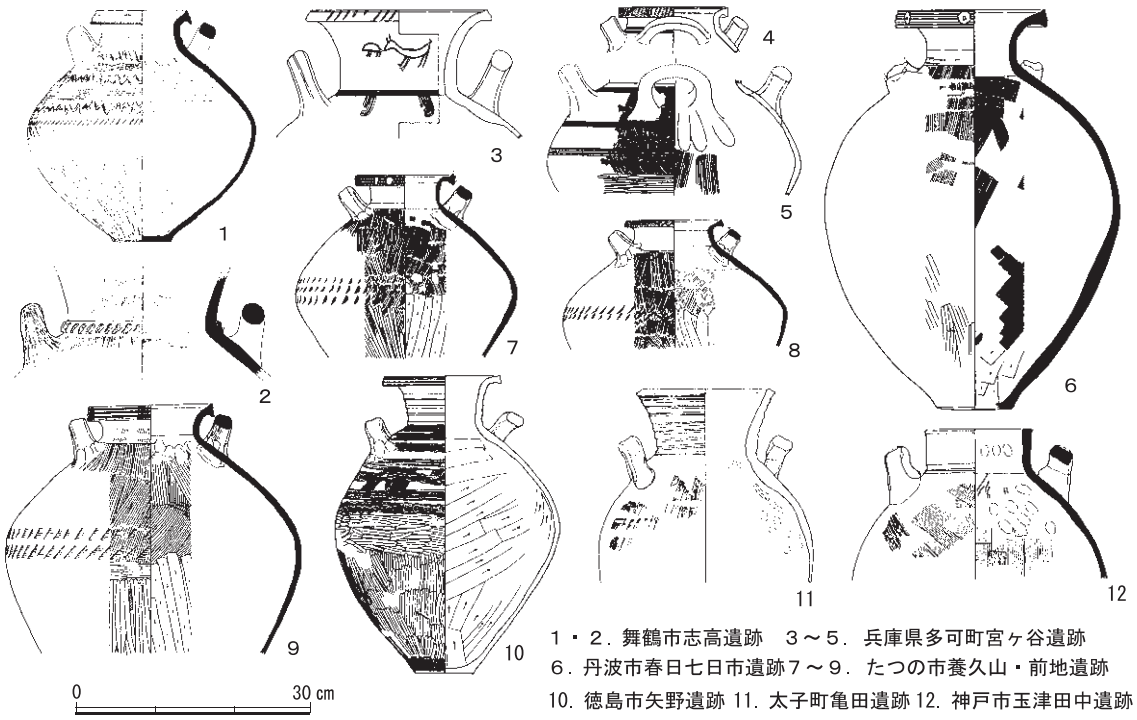
代中国で用いられた貝貨がある。貨幣あるいは威信財として使用された歴史上重要な考古学的遺物である。これを保管する容器が貯貝器であり、その重要性ゆえに石寨山遺跡の青銅製貯貝器に見るように非常に装飾的な製品が生み出されて行く。

こうしてみると、本例は、弥生時代中期後半期の壺に納められた貨幣としての貝と評価しうるが、日本列島の弥生文化において、キイロダカラが貨幣あるいは威信財として用いられた確かな証拠はない。

５．双把手をもつ広口壺の系譜

今回検討した広口壺は、３節で述べたように、口頸部の特徴から瀬戸内地方を本源地とする土器とみられる。近畿地方北部では、弥生中期後半以降、凹線文系土器が加古川ルートで流入し[(注10)]、発見された広口壺のような凹線文Ａ種を施す肥厚した口縁部をなすタイプも在地的に受容されて組成の一部をなしている。そのため搬入品か否かを判断することは困難な作業であるが、以下にはさらに特徴的な属性を検討し、その出自を考える手がかりとしたい。

ａ．口縁部下端のキザミ　系譜を考えるうえで重要な属性の一つは、口縁部下端に施された連続するキザミである。こうした口縁下部にのみ施されるキザミは中期前半においては、畿内第Ⅱ～Ⅲ様式前半の土器などに広くみられるが、中期後半には例外的なものとなり、さらに凹線文Ａ種とともに出現する例は稀である。瀬戸内系土器の影響がみられる由良川流域にあっても興・観音寺遺跡に一例を確認できるが、極めて出現率の低い属性である。本例は鋭利な工具による鋸歯状を呈するキザミであり、在地の広口壺にほとんど類例を確認できない。瀬戸内地方でも地域的



１・２．舞鶴市志高遺跡　３～５．兵庫県多可町宮ヶ谷遺跡
６．丹波市春日七日市遺跡７～９．たつの市養久山・前地遺跡
10. 徳島市矢野遺跡 11. 太子町亀田遺跡 12. 神戸市玉津田中遺跡

第７図　「双耳壺」の類例

特色として現れる地域は限られ、播磨では大形直口壺の口縁部に特徴的にみられ、また徳島県名東遺跡や矢野遺跡など阿波の吉野川流域の遺跡で、凹線文系の甕の属性の一つとして現れるようである。

ｂ．文様構成　櫛描波状文＋櫛描直線文＋櫛描列点文という組み合わせをもつが、注目されるのは最下段の櫛描列点文である。北丹波における中期後半の広口壺の施文構成は櫛描波状文・同直線文をもつが、その構成に櫛描列点文は基本的に含んでいない。こうした組み合わせで発現するものはいわゆる播磨型とされる装飾広口壺の文様系譜に特徴的である。

ｃ．体部内面上半の指頭圧痕　内面調整は下半部が下から上へケズリを施し、上半に多量の指頭圧痕が認められる。ケズリは瀬戸内地方を発し、近畿地方北部にも通有の技法であるが、そのなかでも下半にケズリを、上半に多量の指頭圧痕を伴う土器群は瀬戸内地方の特色であり、特に四国系土器ではその系譜は後期にまで続く。

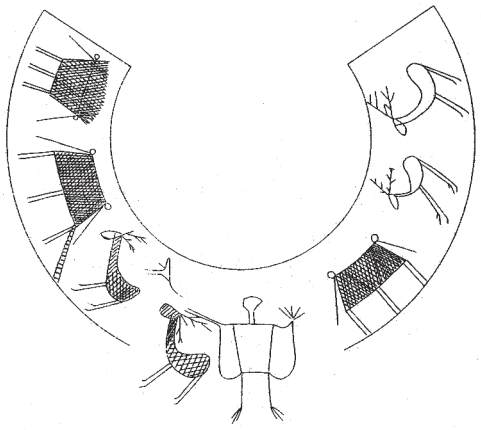
ｄ．肩部の双把手　広口壺・直口壺などの肩部に付される双把手は、瀬戸内周辺地域から北丹波、兵庫県側の西丹波などに分布するが、その類例は極めて少ない。由良川流域の北丹波では、志高遺跡で本例のほかに頸部径などから直口壺と推定される一例が報告されている（第７図２）。この資料は全体に堆積岩類を混和材の基調とする橙褐色系の色調を呈する精製品であり、搬入品の可能性がある。由良川流域では、興・観音寺遺跡でも剥離痕から推定される直口壺とみられる一例がある。また丹波における類例は、兵庫県丹波市春日七日市遺跡（第７図６）や同多可郡中町宮ヶ谷遺跡（第７図３～５）があり、特に後者では動物絵画を描いた広口壺の資料がある。絵画文は頸部に施され、報文では「子猪と後から追う犬」とされるが（第７図３）、筆者は「子鹿を立ち上がらせる雌鹿」を描いた豊穣と再生の祈りを表現したものと考える。種米とする稲籾を保存した容器の可能性が指摘できる特別な容器である。胎土から唯一搬入品とされるが、同遺跡はほかにも広口壺や直口壺など14例が報告され、集中的な出土がみられる特殊な遺跡である。遺跡の立地もまた周囲から見通せない山間部の谷部の閉塞地にあり、遺跡の性格に関わるとみられる。

由良川流域に散見されるいわゆる双耳壺だが、その本現地は瀬戸内沿岸部と推定される。播磨では、兵庫県たつの市養久山・前地遺跡で３点の報告があり、徳島市矢野遺跡でも口頸部の凹線文、体部外面の櫛描文など、基本属性をほぼ同じとする広口壺が出土している。瀬戸内地域では、直口壺に双把手をもつものが太子町亀田遺跡、神戸市玉津田中遺跡、同美乃利遺跡などにもあり、山陽地方などにも類例があるものの、特に瀬戸内東部地域に特徴的な分布をみせる。このうち志高遺跡と最も近似する資料は、西播磨のたつの市養久山・前地遺跡の例であり、広口壺のプロポーションや双把手の付け方・その位置など極めて近い形態をなす（第７図７～９）。３点の広口壺には、頸部凹線文がみられず、体部は櫛描列点文のみを施文するが、同一土坑内の共伴資料には櫛描波状文や同直線文など文様構成の基本属性を志高の広口壺と一致するものもある。祭祀土坑からの一括品として報告される資料であり、この種の壺の用途を考える上で重要である。

以上から、志高遺跡の「双耳壺」は、瀬戸内地域のなかでも特に播磨を中心とする東部瀬戸内地域との深い関係性のもとに製作された土器と考えられる。

６．まとめ

キイロダカラについて森浩一氏は、中国では石寨山遺跡にみるように殷周の時代からこれを貨幣として大量に王侯の墓に副葬する風習があり、弥生時代にその産地であった琉球から中国へ運んだのは主に九州島の倭人であったと推定されている。弥生～古墳時代の本州島では愛好した形跡がないことから、志高の壺から出土したキイロダカラの重要性に着目し、北部九州を介した南西諸島との交流が指摘されている。(注11) 今回検討した広口壺は、弥生中期後葉の北丹波編年第Ⅳ－３様式に該当するものであり、口頸部の特色や細部の属性から、上述したように、瀬戸内地域のなかでも特に播磨を中心とした東部瀬戸内地域と関係性が深い土器である。双把手を持つ土器は瀬戸内側から加古川を俎上するルート上に分布するが、この種の壺が多量に出土した中町宮ヶ谷遺跡例は前述したように、そのうちの一つが鹿を表現した線刻の可能性がある。また今回の壺と形態的に最も近く、複数の出土をみるたつの市養久山・前地遺跡例(第８図)は、祭祀土坑出土とされる一括資料のなかに鹿・司祭者・高床建物の線刻が施された直口壺を共伴し、後者は刀で司祭者が鹿の角を切り落とす姿を表現している可能性がある。(注11) これら２遺跡にみる壺は、共伴資料や出土状況から、いずれも豊穣と再生の意味をもつ収穫に関わる儀礼のなかで用いられた可能性が高いものであり、壺に収納されたものとは、種籾となる稲籾であろうと推定する。



第８図　養久山・前池遺跡の壺にみる絵画

タカラガイは子安貝とも言われ、多産すなわち生命の再生を象徴するものでもある。志高遺跡の広口壺は、養久山・前地遺跡の壺とそのプロポーションが酷似するだけでなく、豊穣と再生を願うという意味でも､その精神性をも同じくするものであると言える。タカラガイを納めた壺は、豊穣と集落の繁栄を祈る儀礼に伴って、集落の入口部に埋納されたものであろう。志高遺跡のキイロダカラは４節で述べたように、切断面をもち貝貨としての造作を受けている可能性が高いものであり、産地が南西諸島にあるというだけでなく、北部九州を介した大陸との交流を窺うことのできる資料でもある。瀬戸内ルートを介して北部九州から運ばれたキイロダカラは、播磨を介在して、加古川を遡り、志高遺跡にもたらされた可能性が高い。河川の両側に山間部が迫り耕作地が限られた志高遺跡は、交易を柱とする集落とみられるが、遠来の地からもたらされたこの貝はまさに遠隔地交易を象徴し、その繁栄を願って埋納されたものであっただろう。長崎県壱岐原ノ辻遺跡にみるいわゆる港湾遺構にも類する大規模な堤防状遺構を検出した同遺跡が、瀬戸内以西の諸地域と日本海側諸地域を結ぶ要となる交易拠点であったことを物語る資料である。

付記

本稿は、平成20～22年に採択された共同研究『京都府における弥生土器集成』（高野陽子・田

代弘・筒井崇史・石崎善久（平成20年）に関わる資料収集作業の一環として報告したものである。執筆分担は、４節を田代が執筆し、ほかを高野が担当した。

今回の資料に関する資料調査および共同研究報告を快諾していただいた舞鶴市教育委員会の吉岡博之氏、松本達也氏に深く感謝の意を表する。また、本稿を成すにあたり、肥後弘幸、岩松保、森浩一の各氏にご教示をいただき、記して謝意を表する。

（たかの・ようこ＝当調査研究センター調査第２課調査第１係調査員）
（たしろ・ひろし＝当調査研究センター調査第２課調査第３係次席総括調査員）

注１　ａ．吉岡博之『志高遺跡－昭和57年度カキ安地区の調査－』舞鶴市教育委員会　1983
ｂ．吉岡博之『志高遺跡－昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査－』舞鶴市教育委員会　1984
ｃ．岩松保「志高遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第17冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1985
ｄ．肥後弘幸ほか『京都府遺跡調査報告書 第12冊　志高遺跡』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989
注２　田代弘「志高の舟戸－堤防状遺構ＳＸ86231・弥生時代の船着場」（『京都府埋蔵文化財論集』第５集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2006
注３　石井清司編『京都府弥生土器集成』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989
注４　肥後弘幸「第３節　弥生土器の編年」（前掲注（１）－ｄ文献）
注５　田代　弘『京都府遺跡調査報告書　第10冊　興遺跡』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1988
田代　弘「由良川中流域の第Ⅲ様式土器について　前・後編」（『京都府埋蔵文化財情報』第51・53号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1992
注６　篠宮正「弥生時代中期中頃から後半の土器」（『神戸市西区玉津田中遺跡－第６分冊－（総括編）』兵庫県教育委員会）　1996
注７　篠宮正「２．東播磨地域における弥生土器編年」（『弥生土器集成と編年－播磨編－』　大手前大学史学研究所）2007
長友朋子・田中元浩「３．西播磨地域の土器編年」（同上）
注８　奥谷喬司『日本の貝２』　株式会社学習研究所　2006
注９　『タカラガイ』誠文堂新光社　2009
注10　深澤芳樹「尾張における凹線文出現の経緯」（『朝日遺跡　Ⅴ』（財）愛知県埋蔵文化財センター）1994
注11　森浩一・高野陽子・三浦到『京都の歴史を足元から探る－丹後・丹波・乙訓の巻－』学生社　2010
＜第５図図版出典＞
兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡－第３分冊－』1995
たつの市教育委員会『養久山・前地遺跡』1995
加古川市教育委員会『美乃利遺跡』　1997
西安田長野遺跡調査委員会・妙見山麓遺跡調査会『西安田長野遺跡群　調査報告（Ⅱ）』2000
兵庫県教育委員会『亀田遺跡（第１分冊）』2000
兵庫県教育委員会『七日市遺跡（Ⅲ）』　2003

恭仁京造営史（下）

伊野近富

c）恭仁京遷都の理由

なぜ、恭仁の地を都と定めたのかについては、いくつかの説がある。A）橘諸兄の相楽別業があることから、自らの勢力範囲である相楽郡に遷都した（喜田貞吉[注14]）。B）地勢が唐の副都洛陽に似ているため、陪都としてこの地が選ばれた（滝川政次郎[注15]）。C）大仏建立のための仮の都であった（瀧浪貞子[注16]）。さらに、瀧浪氏は聖武天皇の東国巡幸を壬申の乱における大海人皇子の行動を追体験をするものと評価している。

これらの説の是非を判断する資料を持たないが、恭仁京遷都の数年前に遣唐使が日本に帰還しており、特に、唐に20年ほど滞在して学を修め、天平７（735）年に帰朝した吉備真備は鉄尺を持ち帰った。それは、天文観察に必要なものであり、冬至の日を正確に判断するため使用された。さらには、古代中国では、都を定める際に必要なものだった。唐の洛陽は大河を取り込んだ都であったという遣唐使の最新情報により、遷都の地を決定したのではなかろうか。聖武天皇は幾度も甕原離宮に行幸しており、ここで漢詩が詠まれた宴が開催されたことは想像に難くない。辰巳正明によれば『懐風藻』に見られる吉野離宮で詠まれた歌には『論語』の山水仁智の世界観が投影されているという[注17]。さらに、塩沢一平氏によれば『万葉集』にある田辺福麻呂の恭仁京賛歌は和歌だけではなく、初唐詩からの表現方法がとられているという[注18]。すなわち、奈良時代前半期は唐への強い傾斜が認められるのである。このようなことから、洛陽に見立てた恭仁京を造営しようと思い立ったのではなかろうか。

d）恭仁宮出土瓦

恭仁宮では多量の瓦が出土したが、その中で特筆すべきは刻印のある瓦である。平瓦や丸瓦の裏面に「刑部」「宗我部」「六人部」「日奉」「真依」など27型式42種974点の文字瓦が確認されている[注19]。上原真人の詳細な検討により、この刻印は文献に見られる官営工房である「西山瓦屋」の製品で、しかも、雇工の生産したものと推定した。綴喜郡井手町石垣にある岡田池瓦窯出土の瓦は、平城宮式であり、恭仁京の瓦とも同笵である。この瓦窯のすぐ北には井手寺跡がある。ここにも同じ瓦が供給されている。しかも、三彩の垂木先瓦も出土しており、単なる地方寺院ではないことが窺えよう。井手の左大臣という異名をもつ橘諸兄創建の寺と考えて間違いない。

さらに、岡田池瓦窯出土の瓦は、城陽市平川廃寺からも出土しており、古代の南山城地域と橘諸兄とが深く関係していることが知られる。平川廃寺は栗隈の地にあり、栗隈氏が建立した寺院であると推定されている（森郁夫[注20]）。諸兄の祖父は栗隈王といい、この名から栗隈氏と深いつながりがあるといえよう。すなわち、橘諸兄（葛城王）は遅くとも栗隈王の時期から南山城に勢力を持っていたといえよう。栗隈を中心とする勢力をバックとして、南山城を牛耳り、さらに、諸兄の段階には井手に本拠を移し、ここに官営工房を据え、恭仁宮造営を支えたといえよう。

e)京域の推定

京域は足利が注目した「賀世山西道より以東を左京、以西を右京とする」という記事により、賀世山西道(鹿背山)を中軸にして京を分けたと推定するのであるが、この賀世山西道は、足利氏が推定した斜めの道ではなく、岩井照芳によって提起された釜ヶ谷を通る南北の道が妥当である。(注21)さて、左京域は宮のある木津川北岸と木津川南岸の現加茂盆地であることは大方の意見の違いはない。しかし、右京については、筆者は明治時代の旧村界境に注目して、足利氏より1町南に南西隅を設定した。したがって、第4図のとおり異例の配置となる。そして、馬場南遺跡は右京の南東隅に合致する。この遺跡の第1期と第2期との間に真東西方向の柵列が認められる。これが恭仁京段階に相当する施設である。(注22)

なお、ここで京の隅を考えるうえで注目すべき史料を紹介したい。現在京都市右京区にある梅宮社は、橘氏の氏神を祀っていた。この神の成り立ちについて、平安時代末期の『伊呂波字類抄』梅宮項には、「大后は氏神を円提寺に祭っていた。この神はそもそも犬養大夫人の祭神で、それを藤原大后と牟漏女王が洛隅内頭に祭り、その後、相楽郡提山に遷し祭られたのである。」とあり、この神はもともと県犬養三千代の祭神であったが、光明皇大后(藤原大后、三千代の娘)と牟漏女王(三千代の娘、諸兄の妹、藤原房前の妻)が洛隅内頭に祭ったというのである。牟漏女王は天平18(746)年正月に亡くなっており、この年までに「洛隅内頭」に祭ったのである。この場合の「洛」を恭仁京とすれば、京域の隅の内のほとり、すなわち、京のコーナー部分に面した所で橘氏の氏神を祀っていたのである。

馬場南遺跡は、筆者による恭仁京の復原案では、右京東南隅に位置している。この外側のあたりに神を祭っていたと想定するのである。馬場南遺跡で確認された「神雄(尾)寺」は、伊藤太の詳細な検討(注23)により、寺名を「カムノヲ」と読み、「神のいます峯」を意味する上代語であり、同義ないし類義語に「神山(カムヤマ)」があることを明らかにした。馬場南遺跡の「カムノヲ」が具体的に指すものは、遺跡の背後にある天神山に違いないと結論付けた。恭仁京右京の東南隅は神の地でもあったのである。

さて、右京の北側はどこなのか。治部卿船王が詠んだと伝える歌がある。「手束弓　手に取り持ちて朝狩に　君は立たしめ棚倉の野に」(『万葉集』巻11、4257)。これは、久迩京都の時の歌なり、と書かれている。意味は「手束弓を手に持って朝狩りのために　君は立った棚倉の野に」ということである。棚倉は現在ＪＲ棚倉駅がある平野が中心である。狩をする場所は京内ではないと考えられるので、この南に右京北京極があったと考えられる。

つぎに、右京の西側はどこなのか。天平16年7月20日に、死んだ妻を悲しんで高橋朝臣が作った歌がある。我が黒髪が白くなるまで添い遂げようと誓ったのに、妻は泣くみどり児を置いて死んでしまったのである。歌は続けて「朝霧の　おほになりつつ　山背の　相楽山の　山のまに　行く過ぎぬれば・・」とある。姿もぼんやりかすかになって、山城の相楽山の、山の間に行って見えなくなったので(以下省略)という意味なので、葬られたのは相楽山であることがわかる。その山は南山城の平野の西側にあり、鹿背山とは平野を挟んだ位置にある。つまり、そこまでは恭

関連年表

西暦	年号	月	日	宮	京
710	和銅３	３	10	都を平城に遷す。	
740	天平 12	12	６	橘諸兄先発して山背国恭仁郷を整備する。	
740	天平 12	12	15	天皇、恭仁宮に幸し、はじめて京都を作る。 太上天皇・皇后は遅れて入る。	
741	天平 13	正月	朔	朝賀、恭仁宮に帷帳をめぐらして行う。 内裏で宴を催す。	
		１	16	大極殿で宴を催す。	
		閏３	９		（平城宮の兵器を甕原宮に運ばせる）
		閏３	15		詔、五位以上のものは（恭仁京へ）帰れ。
		７	10	（元正）太上天皇、新宮に遷る。 天皇、河頭に迎える。	
		７	13		平城の２市を恭仁京に移す。
		８	９	智努王、木工頭に。	
		９	８	智努王、巨勢朝臣奈氐麻呂２人造宮卿に。	
		９	９	宮造営のため、大養徳・河内・摂津・山背 ４か国から役夫 5500 人徴発。	
		９	12		宅地斑給。賀世山西道より以東を左京、以西を右京とする。
		10	16		賀世山の東河に橋を作らせる。 ７月より始めて今月完成。
		10	21	内外の従五位以上宮中に出仕させる。	
742	天平 14	正月	朔	大極殿未完成。	
		１	７		城北苑に幸して宴を催す。 造営の功により智努王物を賜う。
		１	16	大安殿に群臣を集めて宴を催す。大宮に 入る区域の百姓 20 人に爵１級を賜う。	
		２	朔		皇后宮に幸して群臣を宴す。 恭仁京東北道を開いて近江国甲賀郡に通じさせる。
		４	20		皇后宮に御して五位以上と宴す。
		８	５	大宮築造の功により、造宮録正八位下秦下嶋麻呂を従四位下にする。	
		８	12		石原宮に行幸する。
		８	13		宮城以南の大路の西頭と甕原宮の東との間に大橋を作るため、諸国に銭を賦課する。
		９	12	大いに風雨して、宮中の屋墻、百姓の蘆舎を壊す。	
743	天平 15	正月	朔	右大臣橘諸兄、事前に恭仁宮に戻る。 （12.29 から柴香楽宮行幸。1.2 帰還。）	
		１	３	天皇、大極殿に御して百官の朝賀を受ける。	
		１	７	天皇、大安殿に御して、五位以上の官人と宴す。	
		１	12		城の東北にある石原楼に御する。
		４	３	（柴香楽宮行幸。随行は五位以上 28 人、六位以下 2370 人（4.22 条）。16 日帰還）	
		５	５	内裏にて宴。皇太子五節の舞を踊る。	
		６	30		参議民部卿藤原仲麻呂を左京大夫を兼任。鴨角足を右京亮に。
		７	３		天皇、石原宮に御する。
		７	26	（柴香楽宮に行幸。橘諸兄・巨勢朝臣奈氐麻呂ら留守官に任じられる。11.2 帰還。）	
		11	13	内裏に宴する。	
		12	24	平城の器杖を運び、恭仁宮に収納。	
		12	26	平城の大極殿ならびに歩廊を壊して恭仁宮に遷し造る事４年、その功わずかに終わり、用度の費やす所計るべきもなし。ここに至って更に柴香楽宮を作る。よって、恭仁宮の造作を停める。	
744	天平 16	閏正	朔		百官に問う。恭仁京五位以上 24 人。六位以下 157 人。難波京五位以上 23 人、六位以下 130 人。
		閏正	４		市人に問う。難波京１人、平城京１人、あとは恭仁京。
		閏正	９		巨勢朝臣奈弖麻呂、藤原仲麻呂を市に遣わす。 （恭仁京の）京職から命じて諸寺と百姓の舎宅を作らせる。
		２	20	高御座ならびに大楯を難波宮に運ぶ。 水路で兵庫の器杖を運漕させる。	
		２	21		恭仁京の百姓で、難波宮に移住することを希望するものの移住を許す。
		７	20		万葉集に相楽山を葬地とした歌あり。
745	天平 17	５	３	造宮輔従四位下の秦公嶋麻呂に恭仁宮を掃除させた。	
		５	６		天皇の一行が（5.5 柴香楽宮を出発し）恭仁京泉橋に至った時に、百姓が道の左から拝謁し、万歳と称した。この日、恭仁宮に入る。
		５	10		この日、恭仁京市人が平城に移って行った。暁夜も争って行き、相接して絶えることがなかった。
		５	11	平城に行幸。中宮院を御在所となし、旧皇后宮を宮寺とする。	諸司百官おのおの本曹に帰る。
746	天平 18	９	29	恭仁宮の大極殿を国分寺に施入する。	

仁京域ではなかったことがわかる。恭仁京復原案の足利案でも伊野案でも右京の西端は平野の中央部に想定されている。

田辺史福麻呂の長歌に「・・山背の　鹿背山のまに宮柱　太敷き奉り・・」(『万葉集』巻６、1050)とある。これは、鹿背山のあいだ(山中)、右京と左京との真の中軸線に柱を建てたことを歌っていると推測する。先に布当山が不図に通じ、塔が建てられた可能性を指摘したが、この場合は、宮の中軸線を明示したものであった。「賀世山西道より以東を左京、以西を右京とする」という記事は、恭仁京の人々にとって明確な中軸線を示したもので、「鹿背山のま」は京の真の中軸線を明示した様を歌っているのである。

ｆ)京の段階

第１段階　天平12年12月６日前後から天平13年８月までとする。おそらく、天平12年の冬至の日に算師が大極殿を通る南北軸を仮決定し、大垣の四至を明示したと考えられるが、少なくとも京域の大きさもこの段階で決定されただろう。

大路や小路を掘削し始め、各所に仮設の建物を建設させただろう。宮・京の造営は突貫工事でおこなわれた。道路網は、伊野案の小尺で施工されたならば、約111m方格であっただろう。したがって、二丈(20尺)幅の道路であったならば、その側溝は105m弱ごとに施工されたことになる。上狛北遺跡の溝は少なくとも100m以上の範囲に交差する溝はない。もし、恭仁京段階の溝であるなら、これこそ右(西)宮の内部を区画する溝であるかもしれない。

先に見たように恭仁宮の地は四方を山に囲まれ、その中央を木津川が西流している。川の北西方向には狛山、南西方向には鹿背(賀世)山があり、北側には布当山がそびえていた。遷都から２か月たった天平13年２月の三香原の新都を誉める歌がある。

山背の　久迩の都は　春されば　花咲きををり　秋されば　もみち葉にほひ　帯ばせる　泉の川の　上つ瀬に　打橋渡し　淀瀬には　浮橋渡し・・・(『万葉集』巻17、3907)

まだ、遷都直後で春も秋も体験していない時期なので、常套句が続くが、その後に、「打橋渡し淀瀬には浮橋渡し」という杭を打った橋や、いかだを並べて通行できる仮設橋の風景が浮かぶ。閏３月15日には詔があって「今から以後、五位以上のものは勝手に平城に住してはならぬ、平城に現在いるものは、今日のうちに(恭仁へ)帰れ」と命じている。遷都間もない頃は、多くの人が平城に居住していたことがわかるが、これを契機に恭仁京での居住が基本となったであろう。天平13年７月には鹿背(賀世)山の東の河に橋を作り始めた。８月28日には平城の２市を恭仁京に移すとあり、左右京も徐々に役所関係の施設が整備されつつあることがわかる。ただし、市が左右京に配置されたかどうかは、文献からは確認できない。あるいは、泉津周辺に集約されたのかもしれない。

第２段階　天平13年９月から天平14年８月までである。９月８日に智努王と巨勢朝臣奈弖麻呂の二人を造宮卿とし、体制を強化している。先に見たように、９月９日には宮造営のため大養徳、河内、摂津、山背から役夫5500人が徴発された。９月12日には木工頭智努王、民部卿藤原朝臣仲麻呂、散位高岳連河内、主税頭文忌寸黒麻呂を遣わせて、京都の宅地を班給し、賀世山西道より

以東を左京、以西を右京とした。宅地の大枠ができて、内部の建物建築が始まったと考える。

９月30日に天皇は宇治、および山科に行幸した。五位以上の皆は悉く（車）駕に従ったのである。造成中の右京の地を通過して行幸したのであろう。工事の進捗状況の視察を兼ねていたことは想像に難くない。天平13年閏３月の詔でもあるように平城京から呼び寄せた官人たちの政務場所は用意されていた（もしくは用意しようとした）のである。

10月21日には内住外住の従五位以上の者に命じて、今後は宮中に侍して奉仕させることとした。この頃には右京の実務空間もある程度出来上がったのであろう。１か月前の行幸は、この事実を五位以上の者に周知させるためだったと考えたい。

天平14年２月朔日に、天皇は皇后宮に行幸して造宮卿の巨勢奈弖麻呂、坂上忌寸犬養らに位を授けた。この頃には皇后宮は完成していたと考えられる。皇后宮の場所については甕原離宮に当てる説（鎌田元一）と東宮の北東の石の辻に当てる説（小山雅人）とがある[注24]が、発掘調査が実施されておらず、決着を見ていない。ただし、坂上忌寸犬養は天平11年３月23日に天皇が甕原離宮に行幸された際にも位を授けられており、この点からいえば甕原離宮との関係は深い。瓦の検討から石の辻を皇后宮に当てた説は皇后宮職という役所の瓦であり、とすれば、石の辻にあったのは皇后宮職となる。２月５日に、恭仁京から東北へ続く道を造成し、近江国甲賀郡に通じるようにした。

８月13日に宮城以南の大路の西頭と甕原離宮との間に大橋を作るとある。これは、左京二条大路の西端から木津川を渡って甕原離宮まで橋を通そうとしたことである。遷都直後には平城宮の兵器を運ばせており、重要な場所であった。左（東）宮から右（西）宮 へ行こうとすれば、木津川北岸は急峻で、通行不能であっただろうから、まず、木津川の東の橋を渡り（恭仁宮中軸線上であったのかはわからない）、鹿背山の山中を通過して、右京南部に出て北上し、また、木津川の泉橋を渡るという遠回りの道であった。それが、甕原離宮まで橋で渡れることは、そこからは、陸路ですぐ泉津に入るので、約９kmの距離が約4.5kmに短縮されたことになる。

第３段階　天平14年８月から天平16年正月までである。この時期は紫香楽宮行幸が続く。天平15年４月３日の行幸の際は、付き従った人が五位以上28人、六位以下2370人に上った（４月22日条）。４月16日に恭仁宮へ帰還したが、大勢の人が２週間ではあるが滞在したことは、仮設であれ設備はある程度整っていたと考えられる。現在までの紫香楽宮の発掘成果によれば短期間に３回作り変えられたことが判明している[注25]。本格的な宮の整備とその前のこの行幸が３回の内の２回に相当することは想像に難くない。

７月26日に紫香楽宮に行幸する。11月２日に帰還するまで滞在は４か月に及んだ。この時の恭仁宮留守官は左大臣諸兄（前年５月任命）、知太政官事の鈴鹿王、造宮卿でもある中納言巨勢奈弖麻呂であり、この行幸が長期に及ぶことを想定した布陣となっていた。この間に恭仁京の造営が促進されたことは『万葉集』の歌に認められる。

「今造る　久迩の都は山川の　さやけき見れば　うべ知らすらし」（『万葉集』巻６、1037）これは、内舎人大伴家持が天平15年８月16日に恭仁京を誉めて詠った歌である。今造営している久迩

の都は、山や川がすがすがしいのを見れば、ここに都を作られるのももっともなことだ。と歌っている。

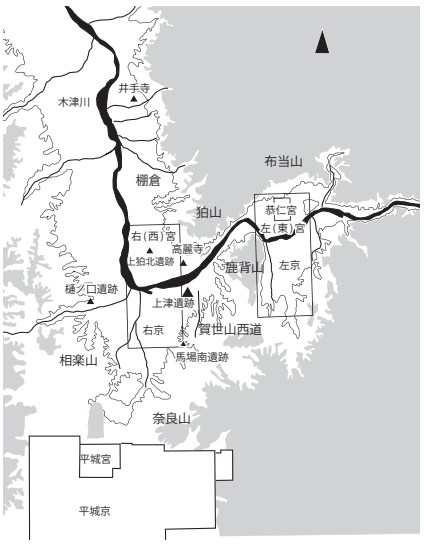
同じ頃に詠まれただろう歌が２首ある。「故郷は遠くもあらず一重山　越ゆるがからに思ひそ我がせし」（故郷は遠くない。山一つ越えるだけなのに望郷の思いがした）、「我が背子と二人し居れば山高み里には月は照らずともよし」（あなたと二人でいるので、山が高くて里に月が照らなくてもかまわない）（『万葉集』巻６、1038・1039）。いずれも天平14年８月には造宮輔であり、この頃も同じ立場であっただろう高丘（岡）河内が歌ったものである。この二つの歌が同じ時に詠まれたのならば、平城京に残した家族を思うと望郷の想いがするが、今夜は友と二人の宴なので楽しい限りだ、ということだろうか。恭仁京造営という大事業の中の一時の憩いを想像する。蛇足だが、一重山は左京で詠んだなら奈良山から続く加世（鹿背）山となり、右京で詠んだなら奈良山となる。天皇不在の時、諸兄のもとで恭仁京造営が進んでいく様が想像できる。

天平16年閏正月に、京職は諸寺や百姓の舎宅を建築するよう命じた。寺を京内に建設することは、本格的な造営段階を迎えたといえようが、この直前には難波宮を首都とするべきかの問いがあり、不安な状況であった。おそらく、左京亮で民部卿でもあった藤原仲麻呂の強い指導があったと思われる。造営の最終段階を迎えたことがわかるが、聖武天皇は突然、恭仁京造営を中止してしまうのである。

同年２月21日には恭仁京の百姓で、難波宮に移住することを希望するものの移住を許す。そして、聖武天皇は難波京に行幸する。その直後、柴香楽宮に行幸するのであるが、難波京に残った太上天皇と橘諸兄は聖武天皇の詔として難波京に遷都することを宣言するのである（２月26日）ここに、恭仁京は名目上都ではなくなる。

６．双宮の都城

以上の段階をまとめると、宮の第１段階は内裏完成。第２段階は大垣完成。第３段階は大極殿完成。第４段階は左（東）宮の完成となる。京の第１段階は市を平城から移した段階。第２段階は役夫を投入し、左京と右京の造営を進めた段階。この段階にはとくに右京北部が整備された。第３段階はこの段階は紫香楽宮行幸が続くが、橘諸兄を中心に造営が急ピッチに進んだ段階である。おそらく、諸兄は右（西）宮に詰め、政務を取り仕切っていたと考えられる。ほぼ、２宮が出来上がり、京も概観は出来上がったと想像する。今後、発掘調査が京内に及べば、大路、小路の道路側溝や建物跡が確認されるであろう。地形の制約によって、やむなく、宮を分けたのであるが、ここに双宮の都城が実現したのである。



第４図　恭仁京の復原案（伊野案）

７．恭仁京研究の今後の展望

2000年段階に磯野浩光氏は「恭仁宮雑考」で、それまでの研究成果を簡潔にまとめた。そして、今後の課題として宮や京の問題を列挙したが、多くの課題は未解決のままである。(注26)

近年、中島正氏は「恭仁宮と恭仁京の実態」で、現在までの研究成果をまとめている。この中で高麗寺と京内寺院について考察している。高麗寺は飛鳥時代に創建された相楽郡の中心寺院である。出土瓦には恭仁宮造営時所用の軒丸・軒平瓦や特徴的な文字瓦が含まれており、恭仁京造営と連動した寺院整備がなされたことを指摘している。足利氏の恭仁京復原案では右京に入るので、京内寺院といえるが、他の寺院には恭仁宮造営時所用の瓦は出ず、宮と高麗寺の関係が深いことを指摘している。(注27) なお、伊野案では右京の東端が、高麗寺の西端と接している。甕原離宮も左京と西端よりやや西であり、いずれも京内ではない。都城設計上基点となった可能性がある。

恭仁京域に関する道については岩井照芳氏により賀世(鹿背)山西道の位置が検討された。そして、ほぼ南北の釜ヶ谷を通る道を想定した。この北端には土馬や墨書人面土器が多数出土した釜ヶ谷遺跡がある。都を疫病から守るため、しばしば道で祭祀が行われたのであろう（本号39ページ)。また、７世紀に敷設された大和三道は泉津までを範囲とするもので、奈良山の南北も三道の延長があったことを推定した。(注28)

伊藤太氏は国見について考え、恭仁京は州見山から国見をしたのではないかというのである。(注29) また、塩沢一平氏は万葉集にある田辺史福麻呂の恭仁京賛歌が実地を見て正確に歌われたことを論証した。(注30)

このように、各分野から諸論が提出されている。さらに、馬場南遺跡で万葉歌木簡が出土したことから、木簡が出土した場所である恭仁京の実態を検討する段階に入ったといえよう。しかしながら、恭仁京についての建物はおろか、条坊に関する溝も確定したものはないのである。100ｍに及ぶ溝は南北溝が上狛北遺跡で、東西溝が上津遺跡でそれぞれ確認されているものの、足利案や伊野案には合致しない。新たな視点で条坊を考える段階にきているのである。

８．恭仁廃都

さて、恭仁京の廃絶はどのように行われたのだろう。

恭仁宮大垣を建設した功績により、異例の出世を遂げた秦公嶋麻呂に命じて天平17年５月３日恭仁宮を掃除させた。この頃、紫香楽宮で地震や火災がたびたび発生し、天皇も意を決したのであろう、５月５日に柴香楽宮を出発し、翌日には車駕が恭仁京の泉橋に差し掛かった。その時、人々は遥かに臨み見て、道の左から拝謁し、万歳の声をあげたのである。人々は天皇の帰還を喜んだにもかかわらず、５月10日には恭仁京の市人が、暁も夜も争って平城へ行き、相接して絶えることがなかったという。ついに、５月11日には天皇は平城に帰還し、中宮院を御在所とした。諸司百官もおのおの本曹に帰ったのである。ここに、恭仁京は廃都となったのである。

９．おわりに

文献には儀礼空間である左(東)宮の造営に関してのみ記述されているが、実務空間であった右

（西）宮もあったのである。『公卿補任』によれば橘諸兄は井手左大臣と呼ばれていた。井手寺の関係から当然である。しかし、西院大臣とも呼ばれたとある。わたしは、実務空間であった西宮（院とも称したか）と深い関連があるのではないかと考えている。

橘諸兄の部下であった田辺史福麻呂は、『万葉集』に多くの恭仁京礼賛と京が放棄された嘆きの歌を残している。最後の歌は「咲く花の色は変はらずももしきの大宮人ぞ立ちかはりける」（巻６、1061）である。歌の意味は、咲く花の色は変わらない。それなのに、（ももしきの）大宮人ばかり移り変わってしまった、と歌うのである。

天平18年９月29日、荒れ果てた恭仁宮の中で、不釣合いに威容を誇っていただろう大極殿が国分寺に施入されたが、その国分寺もいつしか廃絶してしまうのである。

恭仁京は、近年まで、ただ、万葉の世界で命脈を保つのみであったのである。

（いの・ちかとみ＝当調査研究センター調査第２課調査第３係次席総括調査員）

注14　喜田貞吉『帝都』（『喜田貞吉著作集』第５巻　平凡社）　1915
注15　滝川政次郎『京制並に都城制の研究』（『法制史論叢』第２冊　角川書店）　1967
注16　瀧浪貞子『日本古代宮廷社会の研究』思文閣出版　1991
注17　辰巳正明『懐風藻』　笠間書院　2000
注18　塩沢一平『田辺福麻呂論』　笠間書院　2010
注19　上原真人ほか『恭仁宮跡発掘調査報告Ⅰ』瓦編　京都府教育委員会　1984
注20　森郁夫『日本の古代瓦』雄山閣　1991
注21　岩井照芳「恭仁京賀世山西道と上ツ道延長道」（『京都考古』第76号）　1994
「泉津と古代都城」（『古代文化』第62巻の２）　2010
注22　伊野近富・竹原一彦・筒井崇史・松尾史子・丸山香代「馬場南遺跡第２次」（『京都府遺跡調査報告集』第138冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2010
注23　伊藤　太「万葉歌にみる恭仁京と神雄寺のトポス」（『古代学』第３号　奈良女子大学古代学学術研究センター）　2011
注24　鎌田注７文献。
小山雅人「軒瓦からみた恭仁の皇后宮」（『京都府埋蔵文化財情報』第53号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1994
注25　鈴木良章「紫香楽宮から甲賀宮へ」（『都城制研究（４）－東アジアの複都制－』奈良大学古代学学術研究センター）　2010
注26　磯野浩光「恭仁宮雑考」（『京都府埋蔵文化財論集』第４集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001
注27　中島正「恭仁宮と恭仁京の実態」（『都城　古代日本のシンポジウム－飛鳥から平城京へ』青木書店）　2007
注28　注21文献
注29　注23文献
注30　注18文献

人面付き土器の系譜（下）

－温江遺跡出土の人面付き土器を巡って－

岩松　保

５．人面付き土器に見る表現

１）表現の特徴

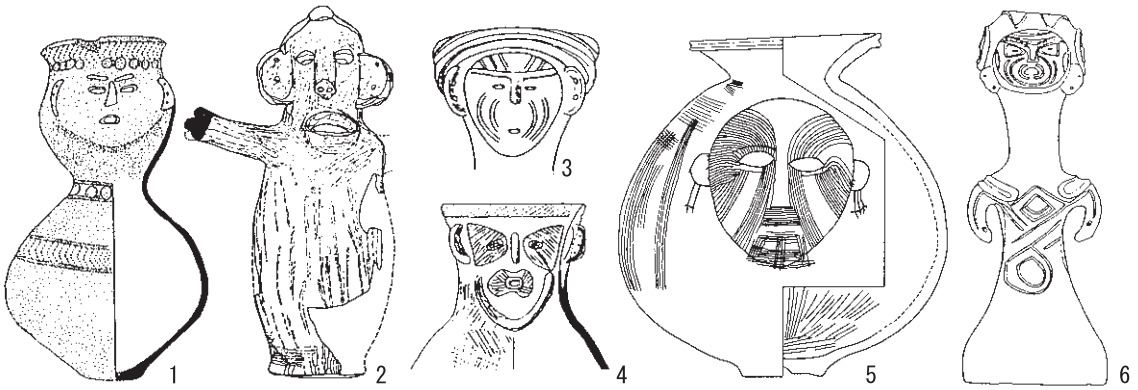
東日本からもさまざまな人面表現が出土している。頭部が立体的に表現された人面付き土器（第４図１～３）、土器の口縁外面にレリーフ状の人面が付けられたもの（第４図４）、土器の体部に線刻で描いたもの（第４図５）、縄文時代の土偶の系譜を引く土偶型容器（第４図６）などがある。また、第１～３図の人面付き土器以外にも、西日本からは、分銅形土製品（第５図）や土器の体部に人面が表現されたもの（第６図６）などが出土している。以下、これらを総じて「人面付き土器」と称して記述したい。

人面付き土器は、九州中部から東北地方に至る広い範囲に分布している。特に立体的に頭部が表現された人面付き土器（第１図１～４、第３図、第４図１～３）は、東日本、西日本ともに出土しており、それぞれ異なった系譜にあると考えられている。東日本のものは弥生時代中期以降に盛行しており、縄文時代の土偶の系譜を引く土偶型容器との関連が指摘されている。一方、西日本のものは弥生時代前期に盛行していること、鶏冠状を呈した頭の形状が「鳥装」と理解されていることから、農耕祭祀との関わりで捉える考えがある。このように、両地域の人面付き土器は漠然と異なるものと考えられているが、その表現の異質性・同質性が積極的に検討されているわけではない。

第４図には東日本出土の人面付き土器の事例を掲げた。これらと西日本出土のものとを通覧すると、以下のような製作上の共通点が認められる。

①鼻・耳は粘土を貼り付けている

②鼻に２個の穴が空いている



第４図　東日本の人面付き土器（縮尺不同）
１．神奈川県上ノ台遺跡　２．群馬県有馬遺跡　３．愛知県古井遺跡
４．茨城県女方遺跡　５愛知県亀塚遺跡　６．長野県腰越遺跡

第５図　分銅形土製品　山口県明地遺跡

③耳介には孔が空けられているが、耳道の表現はなされていない

④目・口はヘラ状工具で刻む

⑤眉上隆起がしっかりと表現されている

⑥頭部の表現は突型、横型、短髪型、丸型などのタイプにまとめられる

こういった特徴は、厳密にはすべての事例で共有されたものではないが、それぞれの造形物に「大まかなに共通した」ものとして認められる。この点から、両地域の人面付き土器には製作者の恣意的で自由な表現がなされていないことは明らかであり、それはとりも直さず、「一定の範型に基づいて製作されていた結果」と捉えられまいか。(注3)

２）耳に空けられたピアス状の孔

上述の①～⑥の中でも、特に③の点は注目される。第１・３図にあるように、西日本出土のものは耳が完存している事例が少なく、不明瞭のものもあるが、温江遺跡出土のものには左右の耳に１個ずつの穿孔があり、西川津遺跡のものは右耳上半に１個、鴨田・川田遺跡出土のものには左右の耳に２個ずつ、東奈良遺跡のものは１ないし２個、目垣遺跡のものには左耳に２個、右耳に３個の孔が認められる。綾羅木郷遺跡出土のものは左耳に２個の孔もしくは刻み目が見て取れ、新免遺跡出土のものには両耳に２個づつの孔が貫通している。第５図の分銅形土製品にも同様の穿孔が認められるものである。東日本の人面付き土器でも、第４図にあるように、両耳にピアスの孔が表現されている。

このように、それぞれの造形物には、耳介に１～複数個の孔が空けられており、その位置からピアスなどの孔を表現したものとも判断される。しかし、これらのピアス状の孔は、弥生人の耳飾り風俗を模して表現されたと考えてよいのであろうか。

弥生時代においては、耳飾り自体の出土が非常に少なく、耳飾りを付ける風習があったことに疑問が呈されているのである。小林行雄は昭和26年刊行の『日本考古学概説』の中で、「縄文時代にあれほど盛行した耳飾にいたっては、この時代にはまったく遺物がない。遺物がないばかりでなく、耳飾りを着用するという風習は、弥生時代に入るとその跡を絶ったと考えられる」とまとめている(p.118)。岩永省三は、「最近まで弥生時代には耳飾りはなくなったと考えられてきたが、頭骨の両側に管玉・ガラス小玉などが置かれた例(福岡・門田、大阪・加美)があり」(岩永1997、p.29、傍点引用者)と、近年の成果を基に小林の見解を一部修正しているが、耳飾りの出土例が大幅に増加したわけではない。

弥生時代においては耳飾りの出土例が少ないという事実から、耳飾りを付けるという習俗は廃れており、そのため、人面付き土器の小孔が弥生人の耳飾り風俗を模した可能性は低いと考えられる。

また、耳の穴は表現されていないのに、装身具の孔は当時の習俗を忠実に模していると考えるのは了解しがたいところである。

耳介に小孔が穿孔されているという点から、それぞれの造形物はそれぞれの地域の製作者が、

それぞれの習俗を真似て作ったものではないことは明らかである。

人面付き土器は、先に掲げたような共通の表現が認められる。このことから頭部は突型、横型、短髪型、丸型などの数タイプがあり、眉上の隆起はしっかりと表現し、目・口はヘラ状工具で刻むのに対して、鼻・耳は粘土を盛り上げて作り、鼻には２個の穴を空け、耳介には孔が空けられるが耳道は表現はしない、というように作るものと考えられていたのであろう。いわば、自由な表現を制限し、ある一定の表現を製作者に課していたと言え、ある範型に基づいて作られたためと言えるであろう。そして、そういった表現は東･西日本の広い範囲で造形されていることから、その範型も広範囲に普及していたものと推定され、造形物はほぼ汎日本的に流布していたことを確認しておきたい。

６．造形の系譜―京都府の事例から―

これらの人面付き土器の造形を作るための範型が、弥生時代において汎日本的に流布していたとすると、弥生時代を前後する時代に認められるのかどうか、を次に見ていきたい。弥生時代に先行・後続する時代に同様の造形物があるのならば、製作上の系譜が存在しており、それを製作するための範型が時代を超えて継承されていたと言えるのではないだろうか。

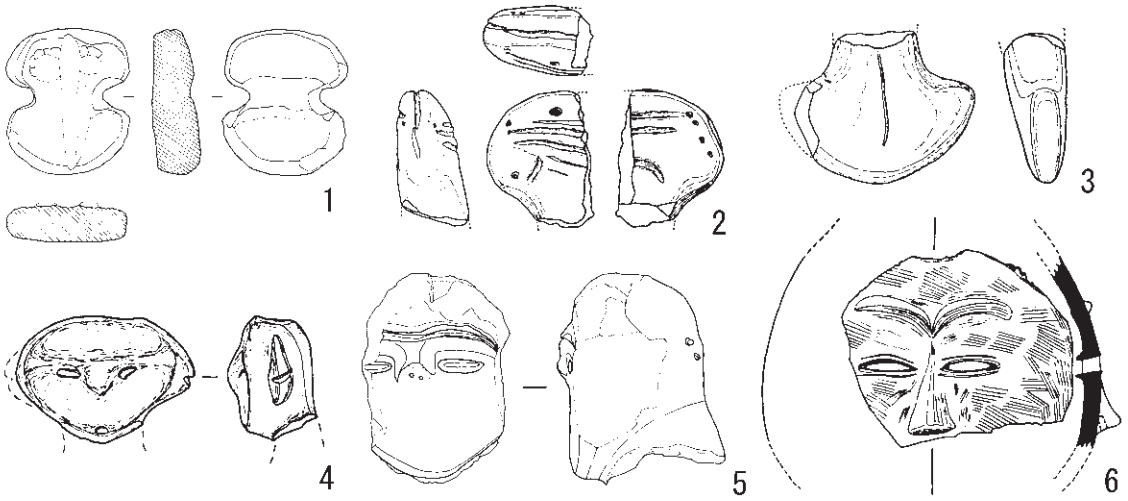
ここでは、京都府内の事例を中心に検討したい。

１）縄文・弥生時代の造形物

京都府下では、温江遺跡の人面付き土器以外に、縄文時代の土偶が８点、弥生時代の人面土器１点が出土している。以下、これらを紹介しつつ、その特徴を見ていきたい（第６図）。

１は両側の中央がくびれる土板状を呈した分銅形土偶で、京都市伏見区日野谷寺町遺跡から出土したものである。乳房部は剝離している。頭部の側面には浅くて細い溝が一条あり、裏面中央は横方向に浅く窪んでいる。縦7.8cm、厚さ2.3cmを測る。縄文時代中期末～後期初頭。

２･３は、舞鶴市桑飼下遺跡からは縄文時代後期の分銅形土偶が２点出土している。２は、表･



第６図　京都府内の土偶・人面（縮尺不同）
１．京都市伏見区日野谷寺町遺跡　２・３．舞鶴市桑飼下遺跡　４．福知山市三河宮ノ下遺跡
５．長岡京市雲宮遺跡　６．向日市森本遺跡

裏面に数条の沈線があり、側縁くびれ部上方から頭部上縁にかけては一条の沈線が施されている。表・裏面とも、縁辺近くの沈線の末端あたりに数個の刺突の孔が認められる。長さ3.5cm、幅2.8cm。３はほぼ平坦であるが、厚さは下端から徐々に厚くなり、くびれ部が最も厚くなっている。表面中央に幅１mm程度の浅い沈線が縦に描かれている。長さ4.0cm、胴部最大幅4.7cm、くびれ部幅2.7cm、くびれ部の厚さ1.5cmである。

４は福知山市大江町三河宮ノ下遺跡出土の土偶である。ハート型の頭部で、幅4.8cm、高さ3.2cm、厚さ2.3cmである。鼻と眉は粘土を貼り付けて立体的に表現されており、隆起した鼻の下端には２基の小孔が空けられている。ヘラ状の刺突により口・目が表されている。顔面の側面には耳が貼り付けられている。右耳は失われており、左耳の縁辺部の中央に刻み目もしくは孔が認められる。耳道の表現はなされていない。縄文時代後期。

５は長岡京市雲宮遺跡出土の土偶である。鼻と眉は粘土を盛り上げており、鼻先は欠損しているが２個の鼻穴が刺突されている。眉は鼻と同時に粘土を盛り上げ、上からヘラ状工具で横方向に線を刻んでいる。目は線刻で表現されている。口の表現はない。耳は、土偶の側面が破損しており不明である。「頭頂部から後頭部の中程にかけて幅約2.5cmの粘土剝離痕が認められる。粘土剝離痕の下端には、径約２mmの穿孔が横方向に２箇所穿たれている」ことから、頭髪および結髪が表現されていたと推測されている。剝離痕の形状より縦方向の「鶏冠」状の突起が付けられていたのであろう。残存高8.5cm、顔面から後頭部までの厚さは5.7cmである。縄文時代晩期。

６は向日市森本遺跡から出土した弥生時代後期の人面土器である。眉と鼻は粘土を貼り付けて立体的に表現しているのに対して、目はヘラ状工具で切れ長の穴が空けられている。鼻の下端には鼻の穴が２個穿孔されている。この人面土器の裏面に粘土紐の継ぎ目や目を切り取った際の粘土のはみ出しが観察されることから、いわゆる「お面」として用いられたのではなく、壺形土器の胴部上半に顔面が表現されたと考えられている。破片の大きさは幅約15cmである。

２）縄文土偶から弥生人面付き土器へ

京都府内出土の縄文・弥生時代の造形物の事例を紹介した。第６図１～３は分銅形を呈した土偶で、５は大野薫の分類（大野2000）による後頭部結髪土偶である。

分銅形土偶は後期初頭以降、北陸・東海から西日本一帯に分布するもので、楕円形をした板状の本体の中央部両側に抉れをもつ平面形状をなしている。乳房を上半に付加し、正中線やヘソを表現して、女性の胴体を具象表現する例もある。新潟県以北の東北地方に分布する三角形土偶の影響下で成立したものと推測されている（伊藤2007）。弥生時代の瀬戸内を中心に分布する分銅形土製品と共通の形状を有しており、「単純に縄文時代からの系譜が認められるものではないが、胴体像の祭祀として脈絡をもつ可能性は考えられよう」（p.63）と、その関連性が指摘されている。

さて、近年の研究で、分銅形土偶と分銅形土製品の系譜関係を論じた論考がある。

大野薫は、近畿地方の終末期土偶には人形土偶、台式土偶、後頭部結髪土偶の三者が認められると指摘した（大野2000、pp.241～242）。小林青樹は、台式土偶の一型式である長原タイプ土偶と分銅形土製品を比較し、目鼻の「Ｔ」「Ｖ」字表現が型式学的に連続して変化すること、とも

に耳部の穿孔が共通すること、頭部表現の強調化とそれに伴う胴部表現の退化が追えること、胴部における線刻が分銅形土製品のくびれ部における横線に変遷すること、ともに身の反りが認められることを指摘した上で、長原タイプ土偶と分銅形土製品が型式学的に追えることから、「長原タイプ土偶の変遷の過程で、近畿から中・四国にかけての地域で分銅形土製品の初現形が生まれた」と論じた（小林2007、p.268）。

このように、分銅形土偶は分銅形土製品へと型式学的な変遷を追うことができ、弥生時代の分銅形土製品は縄文土偶と同一の系譜で捉えられるのである。

一方、後頭部結髪土偶（第６図５）は、「中部・東海地方の後頭部結髪土偶や弥生時代人形土製品との関連が窺える土偶」と指摘されており（大野2000、pp.241～242）、温江遺跡の人面付き土器はこの系譜を引くと捉えられるのである。

さて、後頭部結髪土偶をはじめとして、縄文土偶と弥生時代の人面付き土器の製作上の共通点を掲げると、

①鼻から眉にかけての「Ｔゾーン」は粘土を貼り付けて立体的に表現されている

②鼻に２個の穴が開いている

③耳にピアス状の孔が空けられているが、耳道の表現はなされていない

④目・口はヘラ状工具で刻むが、口の表現は省略されるものもある

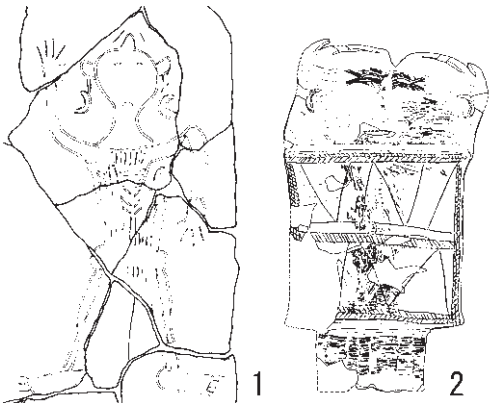
こういった共通点の中でも特に耳に空けられた孔に着目される。一般的に、土偶には、耳介に穿孔するものが多く認められ、穿孔以外にも耳栓型の耳飾りの表現がなされているものや耳朶の位置が肥厚しているものがある。このように、縄文人は土偶を製作するにあたって「耳介」に何らかの意識が働いていたことが窺える。先にも述べたように、弥生社会の風俗を考慮すると、この孔は人面付き土器には必ずしも空けられる必要がない表現である。耳の表現が縄文時代と弥生時代のそれぞれの造形物で共通している点は、縄文人の耳に対する何らかの意識が弥生人に受け継がれて、弥生人の造形物に表現されたことを示唆するものであろう。

また決定的な類似点とは言えないが、土偶と人面付き土器の頭部が特徴的な形状をなしている点も共通している。土偶の頭部の特徴から、結髪形、山形、ハート形、みみずく形等の名称が付けられており、人面付き土器に見られる頭部の奇抜な形状と一脈通じるものと思われる。

このように、京都府内の事例を検討しただけではあるが、弥生時代の人面付き土器と縄文時代の土偶は、造形の表現が共通しているところが多い。弥生時代の人面付き土器は縄文時代の土偶の系譜を引いていると考えられるのではないだろうか。

７．人面付き土器の後裔

前節まで、人面付き土器の頭頂部の突起が、「鳥装の司祭」「当時の髪形」を象ったという解釈を検討し、それらの蓋然性が低いことを指摘した。そして、人面付き土器と縄文時代の土偶との間に表現上の共通点、特に耳に空けられたピアス状の小孔が共通することから、人面付き土器は縄文時代の土偶の系譜を引くものであると考えた。



第７図　古墳時代の人面（縮尺不同）
１．京都市伏見区黄金塚２号墳
２．亀岡市時塚１号墳

写真10　亀岡市時塚１号墳盾持ち人形埴輪

そうすると、弥生時代の人面付き土器は次の時代にどのように受け継がれたのであろうか。

第７図１は京都市黄金塚２号墳から出土した盾形埴輪の鰭部分に描かれた人物線刻画である。左手を腰近くに置き、右手を上に掲げ、両脚はやや開けて直立している。全長19cm、幅４cm。

一見して人面付き土器と共通するのが、頭頂部に表現された三角形状の突起物と両耳に吊り下げられた三日月形の耳飾りである。頭頂部の突起物の外側にある「ハ」字状の線刻についてはよくわからないが、頭頂部の突起物や耳飾りの表現は、まさに、弥生時代の人面付き土器に見られる鶏冠状の突起と耳介の穿孔に通じるものである。また、この人物画は、顔面に目・口が線刻されているのに対して、鼻は粘土を貼り付けられていたようで、剝離痕が確認されている。こういった造形上の表現も人面付き土器と相通じるところである。(注4)

さらに興味深い造形物が亀岡市時塚１号墳から出土している。古墳時代中期の盾持ち人形埴輪である（第７図２、写真10）。

この盾持ち人形埴輪は、円筒埴輪の前面に長方形の板が貼り付けられており、上1/3は人の顔、下2/3に盾が表現されている。鼻は剝離のため失われているが、眉と同じく粘土が貼り付けられていたようである。眉から鼻にかけての「Ｔゾーン」が立体的に作られ、目は穴を空けて表現されており、その回りには線刻で入れ墨が表現されている。耳には半月状の切り込みがなされているが、これが耳道の穴を表現したとすると、目や口の表現が写実的であるのに対して、耳道はさほど写実的に表現されているとは言えない。耳の穴以外のもの―耳介の孔（穴）―を表現したとも考えられる。口は粘土を貼り付けて、一文字に切り込みを入れている。頭の両端には角状の突起があり、その間は２つの山形があり、それぞれの山形の下にはスカシ状の切り込みが入れられている。現存高は62cm。

目・鼻・口の表現の共通性、耳介の孔と考えるスカシ状の表現、頭頂部の突起と共に頭部の形状の奇抜さといった点で、弥生時代の人面付き土器と共通していると考えるのは、飛躍し過ぎであろうか。

時塚１号墳の盾持ち人形埴輪の評価は一旦措くとしても、黄金塚２号墳の人物線刻画は、まさ

に弥生時代の人面付き土器の表現そのものであり、まさにその系譜を引くものと言えるのではないだろうか。

このように、縄文・弥生・古墳時代の造形物が同一の系譜上にあるとするならば、その意匠・意味は、時々に様々な文化要素により変容を受けているではあろうが、縄文土偶の意匠・意味の系譜を引くものと言えるのではないだろうか。そうすると、土偶の製作に係わり、その背後にあったであろう製作者個々人を超えた意匠・意味が、時々にその形・意味を変えていきながらも、時代を超えて、弥生・古墳時代に受け継がれたと考えられるであろう。

縄文時代以降、古墳時代にまでもその意匠・意味が受け継がれたとすると、その後も社会の中に引き継がれたと考えることを否定するのは論理的ではないだろう。そうすると、縄文時代の土偶を作らしめた意匠・意味、ひいてはそのイメージが、現在の我々の心の奥底に形を変えて潜んでいないとは、決して断言できないであろう。

そしてそれらは、我々の心の中にある体系づけられた宗教以前のもの―死に対する絶対的な恐怖、闇に対する本源的な恐れ、自然現象に対する驚異・畏怖―といった感情に近いものではないだろうか。人面付き土器や土偶の形が、現在で言うところの「鬼」というイメージに近いのは決して偶然ではないのかも知れない。

温江遺跡出土の人面付き土器の写真は当調査研究センター調査第１課資料係田中彰の撮影によるものである。独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の丸山真史氏には鶏の出土骨についてご教示を得た。髪形の復原については、茶園桂吾・紫黒夫妻のご協力を得た。ここに記して感謝の意に代えます。

（いわまつ・たもつ＝当調査研究センター調査第２課調査第２係係長）

注３　たとえば鬼は、角、牙、こん棒、虎のパンツ、赤・青の肌の色、いかつい顔、太い眉等が特徴として挙げられるが、角の数や形状については特に定まっていないし、こん棒や虎の皮のパンツは必ずしも必須のアイテムでもない。鬼としての範型があれば、個々の要素は省略できる

注４　鼻は人の顔の中で最も突出した部分であり、それゆえ「可能な場合にはまず立体的に表現されるべきもの」と認識されていたとも考えられる。そのため、「鼻を盛り上げる」という表現だけでは、後述の時塚１号墳出土の盾持ち人形埴輪の鼻と共に、弥生時代の造形物から受け継いだ技法とは捉えられないかも知れない。しかし、頭頂部の突起、耳の穿孔などの要素を「組み合わせた総体」と捉えた場合、それらが共通していることは決して偶然とは捉えられないものであろう

＜参考文献＞

石上七鞘『化粧の民俗』おうふう　1999

伊藤正人「省略形土偶」（『縄文時代の考古学心と信仰―宗教的観念と社会秩序―』11）　同成社　2007

井上光貞『日本の歴史』１　中公文庫　1973

岩永省三『日本の美術　弥生時代の装身具』No.370　至文堂　1997

岩松保「与謝郡与謝野町温江遺跡出土の人面付き土器の諸問題」（『太邇波考古』第 28 号　両丹考古

学研究会）　2010
岩松保・肥後弘幸「温江遺跡第６次発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第139冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2009
大野薫「近畿地方の終末期土偶」（『土偶研究の地平』勉誠出版）　2000
小川安朗『万葉集の服飾文化』下　六興出版　1986
喜田貞吉「漢籍に見えたる倭人記事の解釋（下の一）」（倭人考の十一）（『歴史地理』通篇218）　1917
小林青樹「縄文―弥生移行期における祭祀と変化」（『縄文時代の考古学心と信仰―宗教的観念と社会秩序―』11　同成社）　2007
小林行雄『日本考古学概説』東京創元社　1951
小南一郎「魏志倭人伝訳文」（佐原眞『魏志倭人伝の考古学』岩波現代文庫）　2003
佐原眞『銅鐸日本の原始美術』７　講談社　1979
佐原眞『大系日本の歴史』１　小学館　1987
高橋健自「埴輪及装身具」（『考古學講座』第九・十號　國史講習會　1927『考古学選集』10　高橋健自集　下　築地書館　1972　所収）
筒井崇史・石崎善久ほか「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　平成16・18年度発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第127冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2008
都出比呂志「弥生時代」（『向日市史』上巻）　1983
西本豊弘「弥生時代のニワトリ」（『動物考古学』第１号）　1993
＜図出典＞
『西川津遺跡』Ⅷ　島根県教育委員会・島根県土木部河川課　2001
設楽博己「土偶の末裔」（『新弥生紀行』朝日新聞社）　1999
濱野俊一「東奈良遺跡出土の弥生時代前期の土偶」（『ＭＵＳＡ博物館学芸員課程年報』第９号　追手門学院大学文学部博物館研究室）　1995
『平成９・10年度発掘調査事業報告』茨木市教育委員会　1999
岡部裕俊「福岡県前原市上福岡県上鑵子遺跡出土の人物線刻板について」（『考古学ジャーナル』No.416）　1997
斎藤明彦「坪井遺跡出土の絵画土器について」（『考古学雑誌』第72巻第２号）　1986
藤田三郎「土器に描かれた人物像」（『考古学ジャーナル』No.416）　1997
橋本裕行「弥生人の顔―弥生時代の考古資料に表れた顔について」（『考古学ジャーナル』No.416）　1997
天野暢保「愛知県亀塚遺跡の人面文土器」（『考古学雑誌』第67巻　第１号）　1981
『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1987
『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会　1975
『森本遺跡と人面付き土器』（向日市文化資料館展示解説資料　2000．10）
中島皆夫「京都府長岡京市雲宮遺跡出土の土偶資料」（『古代文化』43－２）　1991
中島皆夫「左京第235次（７ＡＮＬＲＢ－２地区）調査略報」（『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度　（財）長岡京市埋蔵文化財センター）　1991
『黄金塚２号墳の研究　花大研究報告』10　黄金塚２号墳発掘調査団　1997
筒井崇史・石崎善久ほか「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡　平成16・18年度発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第127冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2008
『平安京左京三条四坊四町　京都文化博物館（仮称）調査研究報告書』第２集　（財）京都文化財団　1988

平成 23 年度発掘調査略報

1.長岡京跡右京第1023次・松田遺跡

所 在 地　乙訓郡大山崎町円明寺一丁田

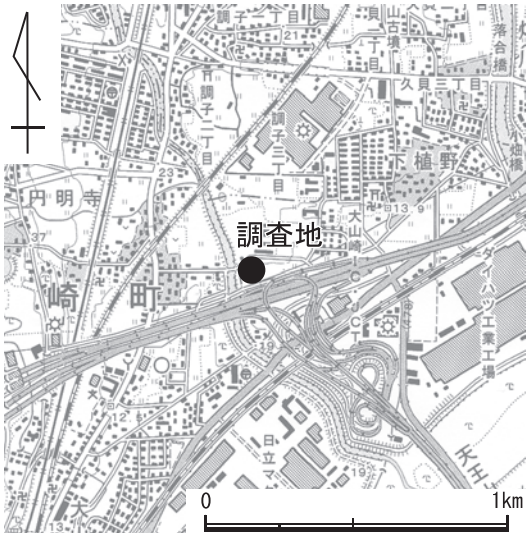
調査期間　平成23年４月19日～11月15日

調査面積　850㎡

はじめに　この調査は、府道大山崎大枝線道路新設改良工事に先立ち、京都府建設交通部より依頼を受け実施したものである。調査地は、長岡京域の南側に隣接し、縄文時代から中世の集落遺跡の松田遺跡にも含まれる。周辺の調査では、大山崎中学校新校舎建設（右京第933次調査）に伴う調査で古墳時代後期の竪穴式住居跡群や中世の掘立柱建物跡３棟・柵列が検出されている。また右京第971・974次調査で古墳時代後期の竪穴式住居跡３基を検出している。右京第977次調査では、13～14世紀の掘立柱建物跡３棟・柵列２条・井戸２基が検出されている。昨年度実施した右京第1008次調査では、13～14世紀の溝２条・土坑２基・井戸４基、平安時代前期の溝２条、古墳時代後期の溝１条、古墳時代前期・弥生時代中期の竪穴式住居跡各１基が検出されている。

調査概要　平成22年度に実施した右京第1008次調査地の東側に設けた３トレンチで調査を実施し、３時期の遺構面を検出した。

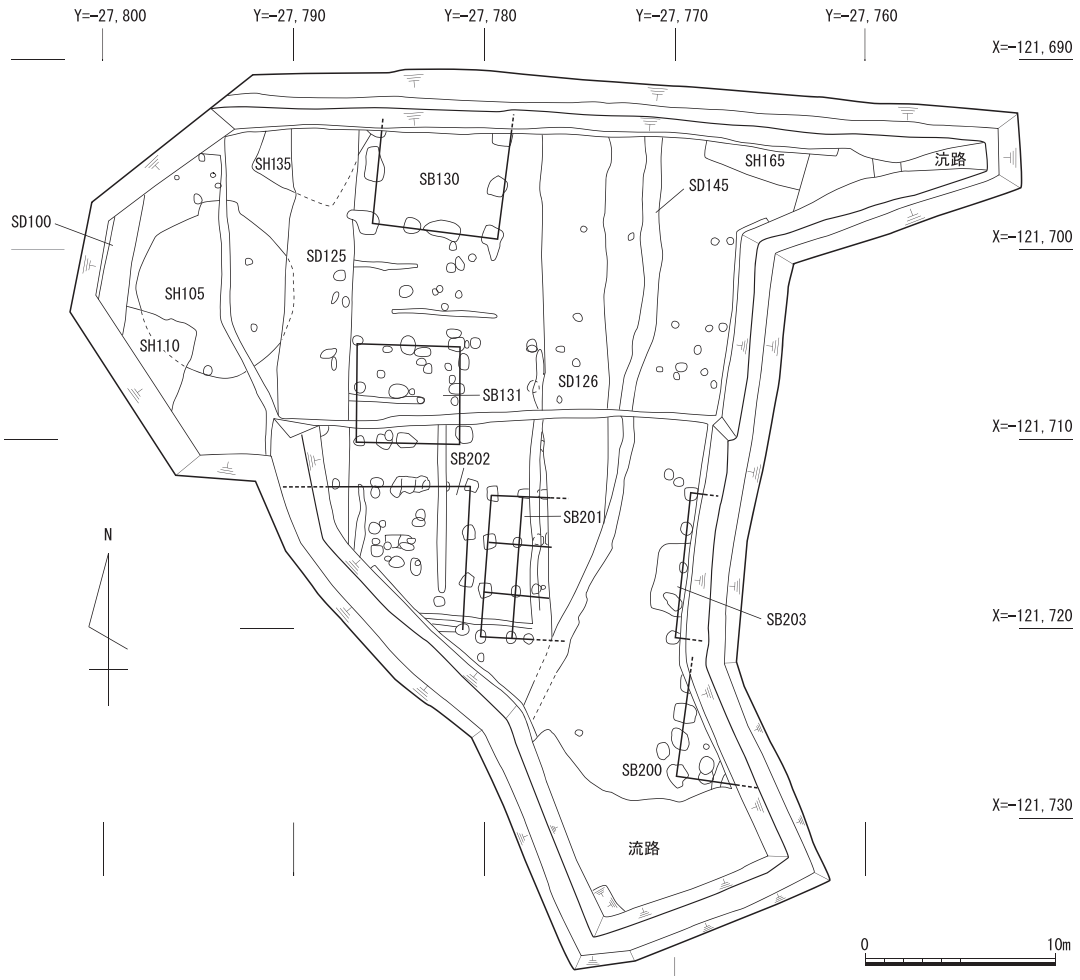
奈良時代末～平安時代初頭（長岡京期）　掘立柱建物跡６棟、溝12条、土坑４基、多数の柱穴、自然流路跡を検出した。建物と溝はほぼ南北方向に造られており、計画的に配置されていたことが窺われる。ＳＢ130は一辺0.7～１ｍ、深さ0.9ｍを測る柱穴で構成される掘立柱建物跡で、東西３間×南北２間以上の南北棟になり、柱抜き取り痕も認められた。南北溝ＳＤ125・ＳＤ126は幅3.4～４ｍ、深さ0.3～0.35ｍを測る。西側の溝ＳＤ125の溝底には３か所で、深さ30cm掘り窪められており、内部に多量の土器や瓦が廃棄されていた。東側の溝ＳＤ126は、調査地の南側で東に屈曲するようであるが、連続して繋がらず、屈曲部で約２ｍほど陸橋状に掘り残している。



第１図　調査地位置図
（国土地理院 1/25,000 京都西南部）

古墳時代の遺構　一辺約５ｍの竪穴式住居跡２基、自然流路跡１条を検出した。竪穴式住居跡は、床面から焼土や炭が検出され、火災を受けた住居と考えられる。

弥生時代の遺構　中期後半～後期にかけての竪穴式住居跡１基を検出した。平面形が八角形を呈



第２図　遺構配置図

し、対角線の長さ8.5mの大型の竪穴式住居跡で、検出面からの深さ0.4mを測る。北側に、入口部分と推定される0.9m×2.2mの張り出し部がある。床面からは、古墳時代の住居跡同様、焼土や炭が検出され、火災を受けた住居と考えられる。住居跡西側で３か所、南東側で１か所、盛土により構築されたベッド状遺構を検出した。中央部には炉が設けられている。

まとめ　長岡京期の掘立柱建物跡や溝などの遺構は、調査地の南・南西側で同時期の遺構が確認されており、広範囲に何らかの施設があったものと想定される。建物跡や溝が南北方向に造られていることや瓦が出土していることなどから、一般の宅地とは考えにくい。これらのことから、長岡京の京域がこの地域まで整備されていたことも考えられるが、検出されたＳＤ125・126は溝の心々で12mを測り、条坊路とは考えにくく、条坊にも合致しない。そのほか長岡京期～平安時代の山崎津関係の施設や、山城国府などの可能性が想定されるが、調査では確認できなかった。

古墳時代後期では、２基の竪穴式住居跡を検出したが、この地域では古墳時代中・後期を中心に60基ほど確認されており、同時期の集落が広く分布していることが明らかになった。

弥生時代については、周辺の調査で弥生時代中期の竪穴式住居跡や方形周溝墓80基以上が確認されているが、後期の遺構は初めての検出となった。また、平面形が八角形と特異な形状を成し、ベッド状遺構を有する特徴がある。関連する地域と比較していく必要がある。　（増田孝彦）

2.興戸（こうど）遺跡 第17次

所 在 地　京田辺市興戸小モ詰１番・７番の１

調査期間　平成23年６月20日～10月６日

調査面積　600㎡

はじめに　調査地は、京都府田辺警察署の南に位置し、府道木津八幡線の西に所在する。

過去の興戸遺跡の調査では、弥生時代の溝、古墳時代の竪穴式住居跡・溝・貯蔵穴状の土坑や、奈良・平安時代の掘立柱建物跡が検出されている。また、今回の調査地の周辺には興戸廃寺が想定されており、関連した遺構・遺物の検出が期待された。

調査の概要　調査は、土置き場の確保のため西半部で３か所、東半部で３か所の合計６か所のトレンチをそれぞれ２回に分けて実施した。

（１）中世　調査地の東よりで検出した沼状の溝は南西部の高い地点で掘られた溝が、北東に流れて沼状となり、排水状況が悪くなっていた。溝内からは瓦器椀や土師器などが出土した。

（２）奈良～平安時代　調査地の西半部で柱列を検出した。柱列は東西方向に並んでいるものと南北方向に並んでいるものがあり、柱間の距離は不揃いであることから複数の建物の可能性がある。調査地の東半部では、西から溝、溝、中央部で溝を検出した。各溝からは、須恵器の杯や布目瓦などが出土した。

（３）奈良時代以前　調査地の中央部では下層で、奈良時代以前の水田と考えられる遺構を確認した。砂層で埋まった粘土層には、鋤先と考えられる連続した穴や、稲株痕跡を検出した。調査地の北部では幅約2.5～4.0mの古墳時代の川跡を検出した。埋土内からは古墳時代前期の小型丸底壺、高杯がまとまって出土した。

まとめ　今回の調査では、主として古墳時代と奈良・平安時代、中世の遺構を検出した。その中でも奈良･平安時代の遺構では、柱穴列･溝･柱穴などを検出し、出土遺物には布目瓦・灰釉陶器など一般の集落ではあまり出土しないものが含まれていた。

これらの調査成果は、調査地の周辺にあったと想定されている興戸廃寺を考える上で貴重な成果を得ることができた。また、洪水によって砂礫で埋まった水田跡や溝跡からは、当地が自然災害にみまわれた歴史が明らかになった。

（戸原和人）

調査地位置図（国土地理院 1/25,000 田辺）

3.椿井（つばい）遺跡 第５次

所 在 地　木津川市山城町椿井松尾・松尾崎地内

調査期間　平成23年７月11日～８月19日

調査面積　201㎡

はじめに　今回の調査は、京都府農林水産部が実施する平成23年度府営基幹農道整備事業山城２期地区に先立ち、京都府山城土地改良事務所の依頼を受けて実施した。椿井遺跡は、木津川右岸の段丘上に立地する縄文時代から古墳時代、及び中世の遺物散布地・集落跡である。また、調査対象地に隣接する丘陵上には松尾古墳群が所在する。

調査地位置図
（国土地理院 1/25,000 田辺）

調査概要　調査対象地は南向きの丘陵に位置しており、農道整備事業の施行により大きく削平を受ける地点を中心に、５か所の調査トレンチを設定した。１～４トレンチは、丘陵頂部に存在する平坦面を中心に、５トレンチは、南端の最も低位となる丘陵裾部に設定し調査を実施した。１トレンチでは、現在の平坦面に重複する幅６ｍ程を残して、崖状に大きく抉られた地形が確認でき、２～４トレンチでは、現代の盛土を除去すると、ベースとなる明黄褐色砂質土となっていた。いずれの調査地点においても顕著な遺構・遺物は確認されなかった。５トレンチでは現地表から約３ｍ下まで掘削したが、砂質土の厚い堆積を確認したのみで、遺構は検出できなかった。

調査地全景（空中写真、北から）

まとめ　今回の調査では、現代の土取りや竹林造成により本来の地形を大きく改変されていたことが確認できた。いずれの地点においても顕著な遺構は検出することができず、すでに削平を受けたものと考えられる。しかし、５トレンチの遺物包含層からは、細片ではあるが古墳時代後期の遺物が出土しており、削平を受けた丘陵上には、松尾古墳群を構成する古墳が存在していたものと推察される。

（奈良康正）

4.長岡京跡右京第1027次・松田遺跡

所 在 地　乙訓郡大山崎町円明寺松田

調査期間　平成23年８月１日～10月６日

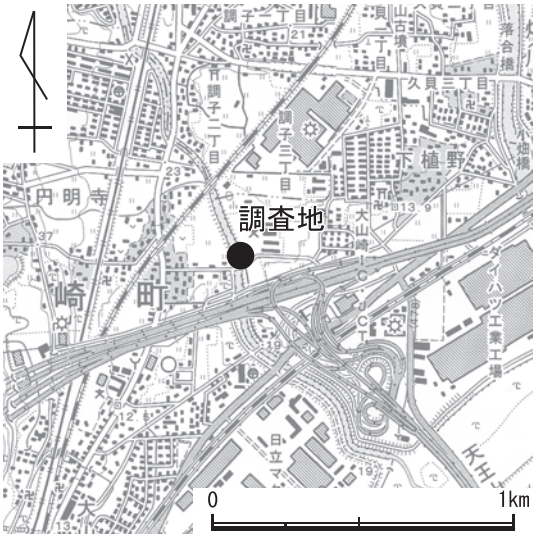
調査面積　350㎡

はじめに　調査対象地は、長岡京条坊復原（新条坊）図によれば京外となるが、旧条坊によれば右京九条二坊十四町にあたる。また、大山崎中学校中心に南北500m、東西350mの範囲に広がる、縄文時代～中世にかけての集落遺跡である松田遺跡の南西部にあたる場所である。周辺の調査では、大山崎中学校建て替えに伴う右京第933次調査で弥生時代に流路跡、古墳時代の竪穴式住居跡、中世の掘立柱建物跡柵列などが検出されている。また、右京第997次調査で中世の建物跡や井戸などが検出されている。右京第1008次調査で中世の建物跡、古墳時代の竪穴式住居跡などが検出されている。この調査は京都縦貫自動車道整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社関西支社京都工事事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要　調査地点は右京第997次調査地に接した南東部と南部である。南東部では柱穴３か所と砂が堆積した浅い流路跡を検出した。柱穴の１か所は右京第997次調査で検出された柵列ＳＡ35の延長部分にあたり、瓦器椀が出土した。南部の調査では、北東部で柱穴を８か所検出したが建物跡に復原できていない。柱穴の底部に石を置いたものがある。北西部で南北2.2m、東西1.2m範囲に集石があり、周辺からまとまって土師器、瓦器、陶磁器、輸入銭などが出土した。北隣で土師器皿が重なり、斜めに置かれた様な状態で出土した。集石に関連した掘形はなかった。中央部で幅1.3m前後の東西方向の素掘り溝１を検出した。東北側砂礫層の西端の一部分を土橋状に掘り残している。素掘り溝から13世紀後半～14世紀前半の土師器・瓦器・陶磁器などが出土した。

まとめ　今回の調査では長岡京に関連した遺構は検出していない。包含層などにごく少量の９世紀前半の遺物が出土した。東西方向の素掘り溝１の南側に遺構はなく、右京第997次調査で検出された中世集落の南限の溝と推定される。なお溝１は北に９度振れている。また、調査地は断ち割り等から北東部の砂礫層から西および南西方向に砂・砂質土が堆積した流路で、下層に住居跡などの遺構が存在しないことを確認した。

（石尾政信）



調査地位置図
（国土地理院 1/25,000 京都西南部）

発掘余話第５回

苦難を乗り越えた先祖たち

発掘余話の第１回では、発掘調査でみつかった「自然災害」の遺跡とその痕跡を紹介しました。古代から現代まで人々は自然の脅威を体感してきましたが、その自然災害をそのまま受け入れているだけでなく、その災害に打ち勝っていこうとする姿が遺跡（遺構・遺物）からみてとることができます。

今回は、古代から近代までの、ひとびとの不安や悩み、自然の脅威を乗り越えてきた様子を垣間見ることのできる遺構・遺物を紹介します。

南丹市野条遺跡は、弥生時代後期の集落跡であり、竪穴式住居跡が数基みつかっています。この竪穴式住居では突発の火災、あるいは戦乱などの要因で火を受け、焼失した家屋がみつかりました。野条ムラの全容はまだわかっていませんが、突発の火災があった場合にはムラのなかで、竪穴式住居を新規に建て替えたことが考えられますし、戦乱で失われたムラであったと仮定しても、周辺にはほぼ同じ時期の集落（大谷口遺跡など）があり、また古墳時代以降、古代中世へと野条ムラ周辺ではムラを形成されていることがわかります。

京田辺市魚田遺跡は、木津川によって形成された沖積地にあたります。この遺跡では、古代・中世の集落遺跡の存在を予想して発掘調査を進めましたが、数層にも分かれる砂の堆積層が１ｍ以上の厚さで堆積していることがわかりました。この堆積砂の下層には黒色土の安定した堆積土があり、その堆積土の上面では鋤などの農具で掘削された溝状の掘り込みが幾筋もありました。厚く堆積した砂層は木津川の堤防決壊によって川砂が堆積したもので、その下層の黒色土は畠に利用するために盛り上げられた土であることがわかりました。黒色土の下層でも砂層が厚く堆積しており、幾度となく木津川の洪水にみまわれながらも、耕地として整備された様子がわかりました。

木津川市釜ヶ谷遺跡は、天平12（740）年、平城宮から恭仁宮に遷ったこの恭仁宮（京）を分ける道として鹿背山西道と想定されている地点にある奈良時代の遺跡です。この遺跡では墨書人面土器・人形・土馬などのマツリに関連した遺物が多数出土しました。これらのマツリの品々は節句・大祓え、不吉な事象が起こったときに人々が使用した道具として使われたもので、古代のひとびとはこれらの道具を使い、不安や悩み・穢れを解消していたことがわかります。

今回は紹介しませんでしたが、平安時代以降、律令国家衰退・世情不安から経典を埋納した経塚遺構（福知山市大道寺経塚等）、死者の埋葬に際して銭貨を棺に入れ死後の思いを込める墓（福知山市高田山古墓等）など数多くの遺跡がみつかっています。古代からひとびとは自然災害や数多くの不安・病気・世情不安をこれらの道具を用いて乗り越えてきており、現在のわたしたちが今存在します。

（石井清司）

罹災家屋（野条遺跡他）

災害にあって被害を受けた罹災家屋が、発掘調査で見つかることがあります。

古代の人々は、地面に竪穴を掘り、床を作る。そして、里山や森、川辺など、身近にある自然の素材で建屋を造る。これは竪穴式住居と呼ばれています。

竪穴式住居を発掘調査すると災害にあって被害を受けたとみられる痕跡を残した家屋が偶然、見つかることがあります。罹災家屋にはいろいろなものがあります。地震による断層や噴砂で引き裂かれたもの、火山の火砕流で蒸し焼きになったもの、原因は明らかでないですが火災によって焼失したものなどです。

ここで紹介する事例は、京都府南丹市八木町野条遺跡でみつかった弥生時代後期の集落のなかにあります。弥生時代後期の野条ムラは、東西500m、南北300mに集落があったと推定しており竪穴式住居跡が数基みつかっています。竪穴式住居のなかには、床面に土器がなく、柱や覆屋の老朽化により移転したもののほか、火災原因を明らかにすることは出来ない罹災家屋（第４・７次調査ＳＢ01）があります。

第４・７次調査ＳＢ0301は一辺約６mほどの平面形が正方形の竪穴式住居跡で、この住居跡を掘り進めていくと、床面に近づくにつれてたくさんの炭や灰が集積していることがわかりました。炭や灰は、当時の生活用具であるたくさんの土器を覆い、土器は蒸し焼きになり、その時のままの状態でみつかりました。

慎重に掘り進めて行くと、竪穴式住居跡の建屋の骨組みである垂木が、炭化して床面に貼り付いた状態で検出されました。垂木は床面中央に向かって放射状に残っていることから、屋根はほぼ垂直に焼け落ちたと考えられます。

この竪穴式住居の住人たちは、食器などの土器類をそっくり残しているところをみると、留守時に火災が発生したか、滞在していても着の身着のまま逃げ出さざるをえないほど火のまわりが早かったのだろうと思われます。

こうした突然の火災が発生する背景には、単に失火とみることもできますが、戦乱など突発的要因も考えておく必要があります。

野条ムラに新しいムラが作られた形跡はありません。周辺には大谷口遺跡など同時期のムラがあるので、野条ムラの人々は苦難をのりこえて、新しいムラをつくったかもしれません。

（田代　弘）

写真　野条遺跡ＳＢ01

水田から畠へ（魚田遺跡）

魚田遺跡が所在する京田辺市は、京都府南部に広がる南山城平野のほぼ中央部に位置します。西部は生駒山地に連なる丘陵地帯で、東部は北に流れる木津川によって形成された沖積地が広がっています。

今回紹介する調査地は、第７次調査で確認された洪水によって流された砂が堆積した近世の畑地跡の遺構です。

魚田遺跡付近の地形は、畑作地と利用されている微高地と、その周辺の湿田として利用されてきた低地、低地に刻み込まれた流路跡、さらに散在する集落の盛土が特徴です。周辺の地形は、約500m東方を流れる木津川の洪水破堤（堤防決壊）による堆積地形であると考えられています。また、魚田遺跡の北側に所在する八幡市内里八丁遺跡などでは、水田地帯の中に島畠と呼ばれる盛土によって造られた微高地を耕作地として利用していることも発掘調査などによって確認されています。

魚田遺跡は、周囲の低地より１ｍほど高い標高15.5mほどの微高地上にあります。この微高地は、江戸時代末期以降の比較的新しい時期の洪水破堤による堆積によって形成されたもので、周囲の流路跡は江戸時代後期以降の旧河道と考えられています。この流路跡は、洪水流が低地面の上を流れてできた浸食地形であると考えられます。

写真１　溝状遺構断面（北東から）

写真２　溝状遺構断面（北から）

発掘調査で確認された畑地は、幅約0.8mの溝状の遺構と、約0.5mの高さをもつ畔を形成しています。溝状の遺構には、鍬や鋤の痕跡が見られました。

この畑地の上面に洪水で流された砂が一気に堆積した層が見られます。その後も幾度かの洪水によって砂が流された痕跡と思われます。

江戸時代後期以降の洪水によって、洪水砂が流され、遺跡に存在した耕作物を流し、砂が堆積している状況を確認することができました。

魚田遺跡が所在している耕作地として現在も利用されている微高地は、木津川の幾度かの洪水破堤（堤防決壊）にもかかわらず、再び整備され耕作地として使用されていることがわかりました。

（村田和弘）

祓の遺跡（釜ヶ谷遺跡）

『万葉集』に所収されている和歌に次の一首があります。

五十串立て　神酒(みわ)すえ奉る　神主部(はふりへ)が　雲聚(うず)の玉蔭(たまかげ)　見ればともしも)(巻十三　3299雑歌、作者不詳)

その意味はおよそ「五十串を立てる　神酒を供えて　八百万の神を奉る　神主が髪にさしたヒカゲノカズラ　見れば心が引き込まれる」の意と解せ、厳かな神祭りの情景を詠った和歌であることがわかります。歌の冒頭にみえる「五十串」は、斎串(いぐし・いわいぐし)を意味する古語だと考えられています。

さて、平成７年度に実施した木津川市の釜ヶ谷遺跡の調査で、奈良時代の川の跡から、たくさんの串状の木製品(斎串)が出土しました(写真)。周囲には「墨書人面土器」「人形」「土馬」といったマツリに深く関わった品々が点在していました。

これらの遺物は、組み合って特定の場所から発見される事が多く、その有り様から、時の為政者が主体となって執り行ったマツリ（国家的祭祀）であることが提唱されています。その内容は、主として日々生活を送っていく上での様々な不安や悩みを取り払う「禊」や「祓」と呼ばれる行為であったと考えられます。

「墨書人面土器」に描かれたひげ面の鬼面は、災いをもたらす神（厄災）を象徴し、これに穢を封じ込め川に流すことで他界に送り出す呪具です。

「人形」や「土馬」は、人や馬を象った形代（身代わり）で、一撫一吻して穢を移したり、行疫神を他界に送り出すための犠牲風習のひとつの姿と解かれています。釜ヶ谷の人形は全長120cmを図る特大品で、墨書で眉毛や目・鼻が描かれていました。

そして万葉歌に詠われた「斎串」は、それ自体が神の依代となって清浄な水をもとめる祭具になったり、上記の祭具とセットになって、神聖な空間を結界する役割をもっていたと考えられています。

こうした、祭具を用いたマツリが執行される条件をこれまでの研究からみてみると、執行時期は、季節の変わり目(節句)や６月・12月の大祓などと、流行病などの不吉な事象が起こったときが想像されます。

自然災害や戦乱などの人的な災害が、過去に何度も繰り返し起こってきたことは、考古学の調査成果や文献等から知ることができます。人々はその都度、大変な苦労を乗り越えて、生活を営み続けてきました。本編で触れた水辺マツリは、律令国家が執り行った人々の心の悩みを軽減する一種の「心の復興支援」と言えるかもしれません。

（伊賀高弘）

写真　斎串と大型の人形

トピックス　仲ノ段（なかのだん）遺跡の縄文土器

柴 暁彦

１．はじめに

仲ノ段遺跡第３次調査で平成21年に当調査研究センター『京都府遺跡調査報告集』第140冊(注)で報告したところであるが、諸般の事情で報告できなかった遺物についてここに紹介したい。

２．遺跡の立地と環境

仲ノ段遺跡は、京都府北部を流れる由良川の中流域の左岸の低位段丘に位置する。第３次調査は平成21年６月23日～８月28日まで実施した。下流域にあたる低位段丘の左岸には、三河宮の下遺跡がある。この遺跡からは縄文時代後期の方形の竪穴式住居跡などが検出され、包含層および遺構から、縄文時代の遺物が出土している。

３．今回扱う出土遺物について

１）前期の遺物　再録にはなるが、爪形文土器が出土している（１）。深鉢の胴部片である。この時期の石鏃として(16)がある。特徴として抉りが逆「U」字形をなし、深い。使用石材にはサヌカイト(16)と、表面が縞状をなす安山岩(15)がある。

２）中期末の遺物　４は北白川Ｃ式のＣ２類に分類される深鉢の口縁部の突起部分である。外面に３条の沈線が確認できる。

３）後期前半の遺物　土器（２～10）のうち、２は口縁部が外面を肥厚させ、

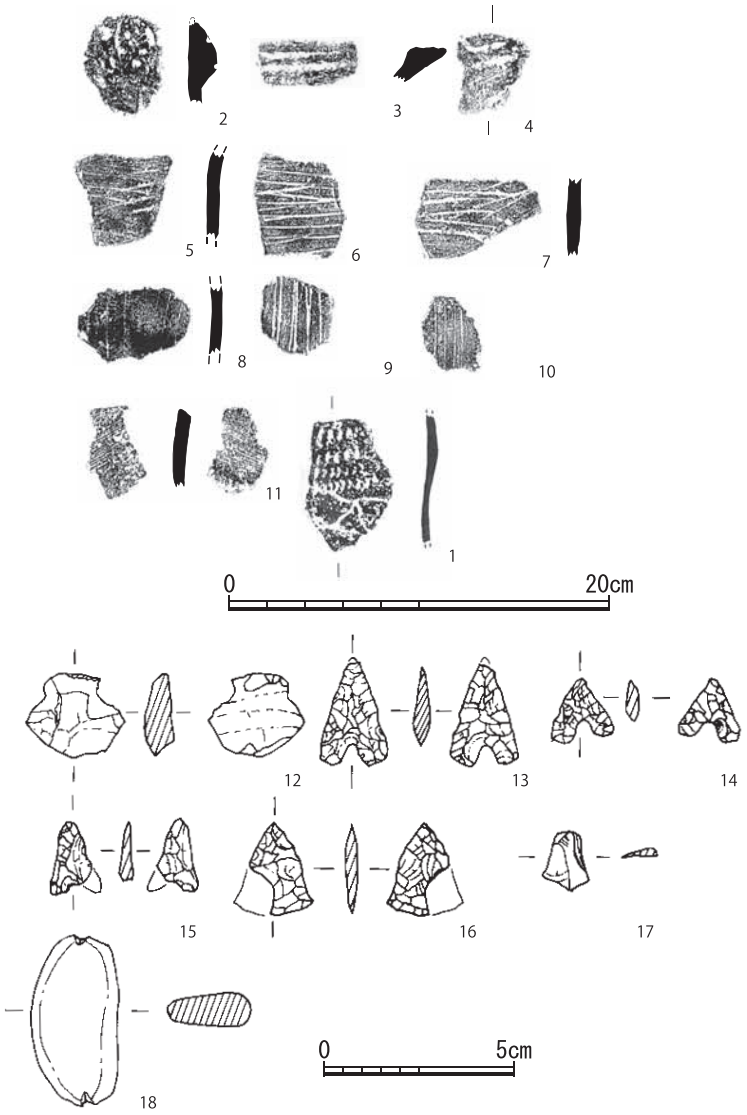


図　縄文土器・石器実測図

写真　縄文土器・石器

瘤状の突起を施す。瘤上を上に３対、下に２対の棒状工具の先端刺突を施している。３は肥厚する口縁端部に二条の凹線を施す縁帯文土器である。５～10は条痕文土器である。口縁部の破片は存在しないが、『京都府遺跡調査報告集』第140冊で掲載した土器の中には口縁部の破片があり、横方向の条痕施文であることから胴部以下を縦方向の条痕を施すものと考えられる。器壁は５～６mmと薄い。11は細密条痕文土器である。舞鶴市の浦入遺跡でも出土している。17は黒曜石の剝片である。18は切目石錘である。使用石材は蛇紋岩である。重さは13.3ｇである。

４．まとめ

今回の報告で京都府中丹地域の土器様相が明らかになった。日本海側に面する丹後地域の舞鶴市浦入遺跡から出土している土器が仲ノ段遺跡でも出土している。縄文時代の遺構は見られなかったものの、出土遺物から調査地西側に所在する山裾の平坦地に集落が存在している可能性が高い。その場所に縄文時代前期～後期前半までの集落が営まれていた可能性がある。この場所は近畿地方でも最大級の河川である由良川が流れており、生活の場として好適地であったと考えられる。

注　黒坪一樹・柴暁彦「仲ノ段遺跡第２・３次」（『京都府遺跡調査報告集』第 140 冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2010

研究ノート

桂川右岸地域における古墳時代集落の動向（１）

古川　匠

１．はじめに

小論で対象とする「桂川右岸地域」（以下、「当地域」と呼称）は、都出比呂志氏による地域区分で、旧制の乙訓郡と、葛野郡の一部を含む地域である（都出1988）。現在の行政区分では、京都市西南部から、向日市、長岡京市、大山崎町にまたがっている。当地域は、京都市の近郊にありながら、近現代にいたるまで田園地帯であった事もあり、多くの古墳が、地域住民によって保存されてきた。また、洛西ニュータウン内の大枝山古墳群など、各機関の努力と住民の理解によって、開発の波の中で保護されてきた例もある。

２．古墳時代研究における当地域の意義

当地域の各首長墳については、戦前の梅原末治氏による調査を嚆矢とし、現在に至るまで、京都大学、大阪大学、立命館大学、そして、各自治体の調査機関による、綿密な学術的調査が実施され、その調査成果が公表されている。また、平成23年の現在においても、向日市元稲荷古墳、京都市寺戸大塚古墳では、範囲確認調査が、また、長岡京市恵解山古墳では、整備を前提にした調査が、継続的に実施されている。当地域の古墳の調査や、古墳出土遺物の研究の成果が、日本列島全体の古墳の調査研究に寄与するところは極めて大きい。

こうした調査実績の蓄積も然りながら、古墳時代研究の学史上、当地域を極めて重要かつ、著名なものとしたのが、都出比呂志氏による首長系譜論（都出1974・1988など）である事は言を俟たない。都出氏は、当地域の首長系譜を、樫原グループ、向日グループ、長岡グループの３グループに大別し、さらに向日、長岡グループを細分した。そして、古墳時代の各時期で、絶えずどれか一系譜の古墳の墳形や規模が優位に立つことから、優位に立つ系譜が当地域の盟主的存在であることを指摘した。そして、この現象を、「畿内」中枢の大王権力の地方支配体制のなかで優位な地位を与えられた結果、と解釈し、こうした首長系譜の継続と断絶の画期が全国各地の首長墳に連動的に見られる現象である事から、大王権力の周辺における政治変動が、各地の首長系譜の継続と断絶に連動している、と結論付けた。都出氏が、当地域をケーススタディとして紹介されたのは、ご自身が長年のフィールドとされ、埋蔵文化財の調査研究・普及啓発活動、行政指導、遺跡の保護等にご尽力されてきた成果に他ならない。

ところで、都出氏による首長墳系譜の認定は、首長墳の立地だけではなく、生産基盤をも念頭に入れたものである。都出氏の言を引用すると、「・・・首長系譜を認定するためには、古墳の

分布とその内容の把握と所属時期に関する正確な情報が必要である。さらに、その地域の古墳時代集落の分布のみならず、首長が依拠した生活圏の研究が重要である。すなわち、水系ごとの生産の場に根ざした生活圏の基礎単位の認定が基礎となる。また畿内地方では、７世紀代の寺院が古墳時代首長系譜の１単位と対応することが多いので、その情報もまた重要となる。」（都出1999）とある。実際、前出の論文（都出1988）では、樫原、向日、長岡の各グループの領域で、飛鳥・白鳳期の古代寺院が造営される事が示され、また、特に向日グループは、弥生時代の高地性集落、北山遺跡との関係が記述されている。

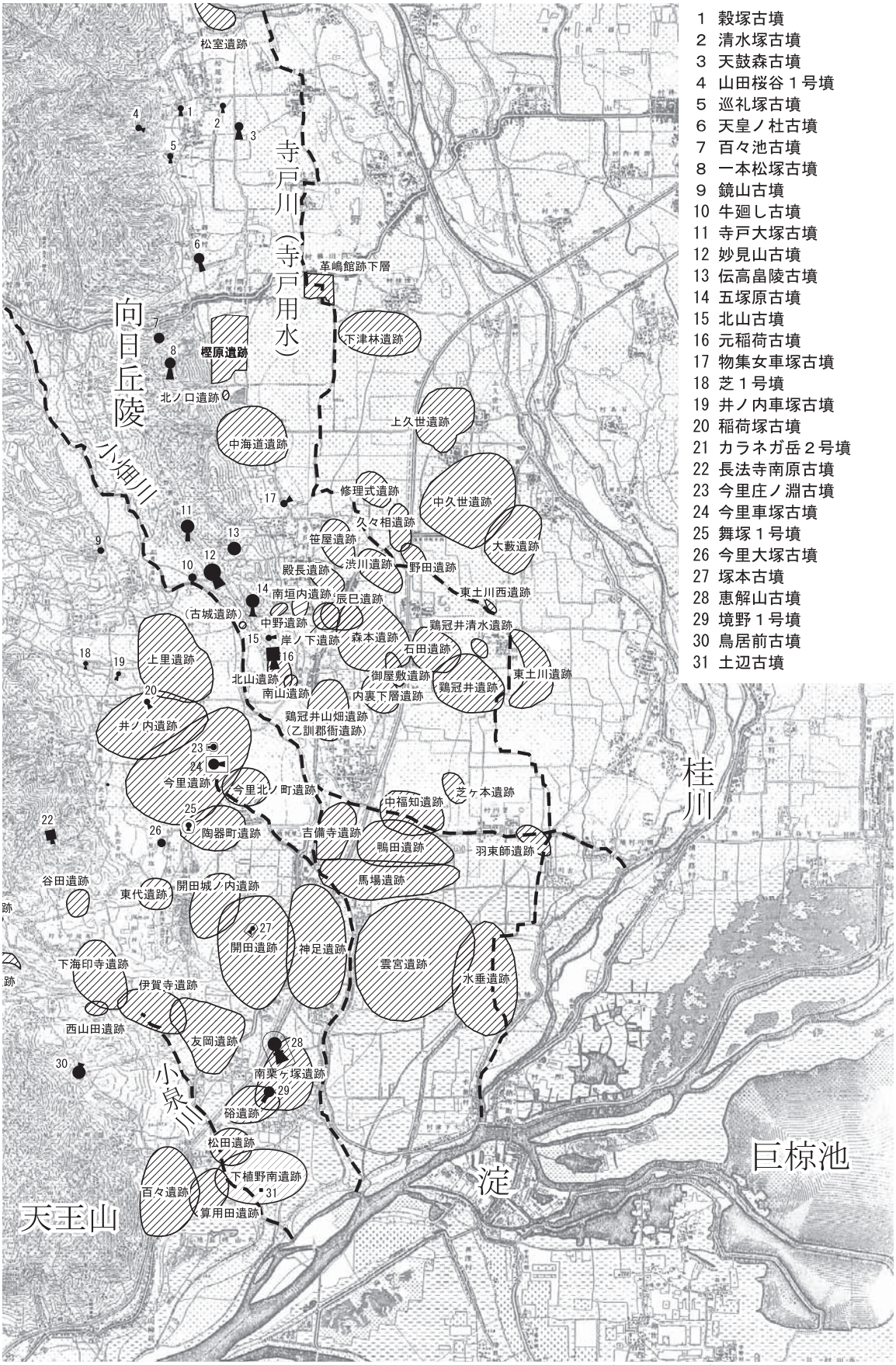
３．古墳時代集落の調査・研究成果

当地域では、墳墓である古墳の調査研究が実施される一方で、各行政発掘調査機関による、古墳時代集落の調査成果も着実に蓄積されている。特に、中海道遺跡、鴨田遺跡および馬場遺跡、今里遺跡、雲宮遺跡および水垂遺跡、上里遺跡、下植野南遺跡および松田遺跡の調査は、各小地域の拠点的集落の消長を示す成果を得ている。また、数多くの古墳時代の集落が、1980年代以降の各機関の調査により、広範囲で検出されている。図は、古墳時代の遺構、遺物が検出された周知遺跡であるが、特に向日市以南では、遺跡数が年々増加している。

古墳時代の集落の動向についても、各調査機関の担当者による詳細な検討が積み重ねられている。中島皆夫氏は、長岡京市域を対象に、集落構造と集落範囲を検討した（中島1995・1998）。國下多美樹氏は、乙訓地域の古墳時代前期の集落の様相を検討し、首長墳の継続・断絶との関連性を指摘した（國下2000）。古閑正浩氏は、下植野南遺跡・松田遺跡およびその周辺における古墳時代集落の消長について、旧流路の位置などについても配慮し、検討を行っている（古閑2011）。環境考古学的な分析も熱心に行われており、湿地の調査では、理化学的分析結果を踏まえた遺跡の評価が試みられている（たとえば宮本・國下・中塚2000）。中塚良氏は景観復原を視野に入れた調査を数多く行っている（中塚1992、2002など多数）。小地域の古墳時代集落、墓域に注目した論考では、山口均氏、國下多美樹氏が、古墳時代中期を対象に考察している（山口1998、國下2009）。また、当地域を越えた視野の研究としては、中海道遺跡の方形区画溝を備える大型掘立柱建物の類例を集成し、首長居館の内外における祭儀用建物と結論づけた梅本康広氏の考察や（梅本1996）、庄内式～布留式初頭の土器の様相に着目した研究（國下1999、田中2003）、乙訓地域出土の韓式系土器を扱った研究（古閑1996）、初期須恵器の導入についての考察（小池2000）などが挙げられる。他にも、単独の集落遺跡に関する論考があるが、ここでは割愛する。

４．研究の意義

上述のように、近年、データの蓄積に真摯に向き合った分析が進められている。いずれも、当地域の古墳時代像を導出するにあたって、有用なものばかりである。ただし、これらの研究の多くは、発掘調査報告書の考察という形で発表されており、その性格上、対象範囲は調査地点の周辺遺跡に限定される。そして、当地域の全域に対象を広げた論考は、前掲の國下氏、また伊藤淳



1　穀塚古墳
2　清水塚古墳
3　天鼓森古墳
4　山田桜谷１号墳
5　巡礼塚古墳
6　天皇ノ杜古墳
7　百々池古墳
8　一本松塚古墳
9　鏡山古墳
10　牛廻し古墳
11　寺戸大塚古墳
12　妙見山古墳
13　伝高畠陵古墳
14　五塚原古墳
15　北山古墳
16　元稲荷古墳
17　物集女車塚古墳
18　芝１号墳
19　井ノ内車塚古墳
20　稲荷塚古墳
21　カラネガ岳２号墳
22　長法寺南原古墳
23　今里庄ノ淵古墳
24　今里車塚古墳
25　舞塚１号墳
26　今里大塚古墳
27　塚本古墳
28　恵解山古墳
29　境野１号墳
30　鳥居前古墳
31　土辺古墳

第１図　桂川右岸地域の古墳時代集落および古墳の分布図（Ｓ＝1/60,000）
（陸軍測量局　仮製地図1/20,000　1889・1890年測量）
図については、大山崎町古閑正浩氏から提供いただいたデータを元に作成した。

史氏(伊藤2005)の前期集落の検討を除き、各自治体の範囲内の集落動向の素描にとどまっている。

本論では、こうした現状をふまえ、現段階の調査成果を可能な限り取り入れた上で、当地域全体の古墳時代の集落の様相把握に努めたい。次回掲載分以降、具体的な分析を行う。

（ふるかわ・たくみ＝当調査研究センター調査第２課調査第２係調査員）

参考文献

伊藤淳史「国家形成前夜の遺跡動態－京都府南部（山城）地域の事例から－」(『国家形成の比較研究』学生社) 2005

梅本康広「中海道遺跡第32次（３NNANK-32地区）－中海道遺跡北東部－発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第44集 （財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会） 1996

小池　寛「乙訓地域の須恵器出土以降集成－古墳時代中期を中心に－」(『京都府遺跡調査報告書』第28冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2000

古閑正浩「京都府乙訓地域の韓式系土器･カマド形煮炊具の様相」(『韓式系土器研究』６　韓式土器研究会) 1996

國下多美樹「乙訓地域における土器交流拠点」(『庄内式土器研究』XX　庄内式土器研究会） 1999

國下多美樹「集落からみた寺戸大塚古墳」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第50集 （財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会） 2000

國下多美樹「野田遺跡の評価をめぐって－桂川右岸北部における遺跡の展開－」(『向日市埋蔵文化財調査報告書第62集（第１分冊)』（財）向日市埋蔵文化財センター） 2004

國下多美樹「桂川右岸小地域内における５世紀の古墳と集落」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第85集 向日市教育委員会） 2009

田中元浩「東土川西遺跡出土土器の検討」(『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』（財）向日市埋蔵文化財センター） 2003

都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』第20巻第４号　考古学研究会） 1974

都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」(『待兼山論叢』22号　大阪大学文学部） 1988

都出比呂志「首長系譜変動パターン論序説」(『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』 大阪大学文学部） 1999

中島皆夫「乙訓地域の古墳時代集落」(『長岡京連絡協議会発表資料』) 1995

中島皆夫「古墳時代のくらし」(『長岡京市史　本文編１』 長岡京市史編さん委員会） 1996

中島皆夫「乙訓地域における住まいと移動の歴史－長岡京市域を中心にして－」(『第10回　京都府埋蔵文化財研究会資料集　住まいと移動の歴史』 京都府埋蔵文化財研究会） 2002

中塚　良「京都盆地西縁･小畑川扇状地の微地形分析－長岡京左京四条二坊（長岡京跡左京第242次調査地）を例に－」(『京都府遺跡調査概報』第47冊 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1992

中塚　良「遺跡の位置と環境」(『向日市埋蔵文化財調査報告書第55集　長岡京跡左京北一条三坊二町』（財）向日市埋蔵文化財センター） 2002

宮本真二・國下多美樹・中塚　良「長岡京域における古墳時代の古環境と遺跡立地」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第51冊　財団法人向日市埋蔵文化財センター　2000

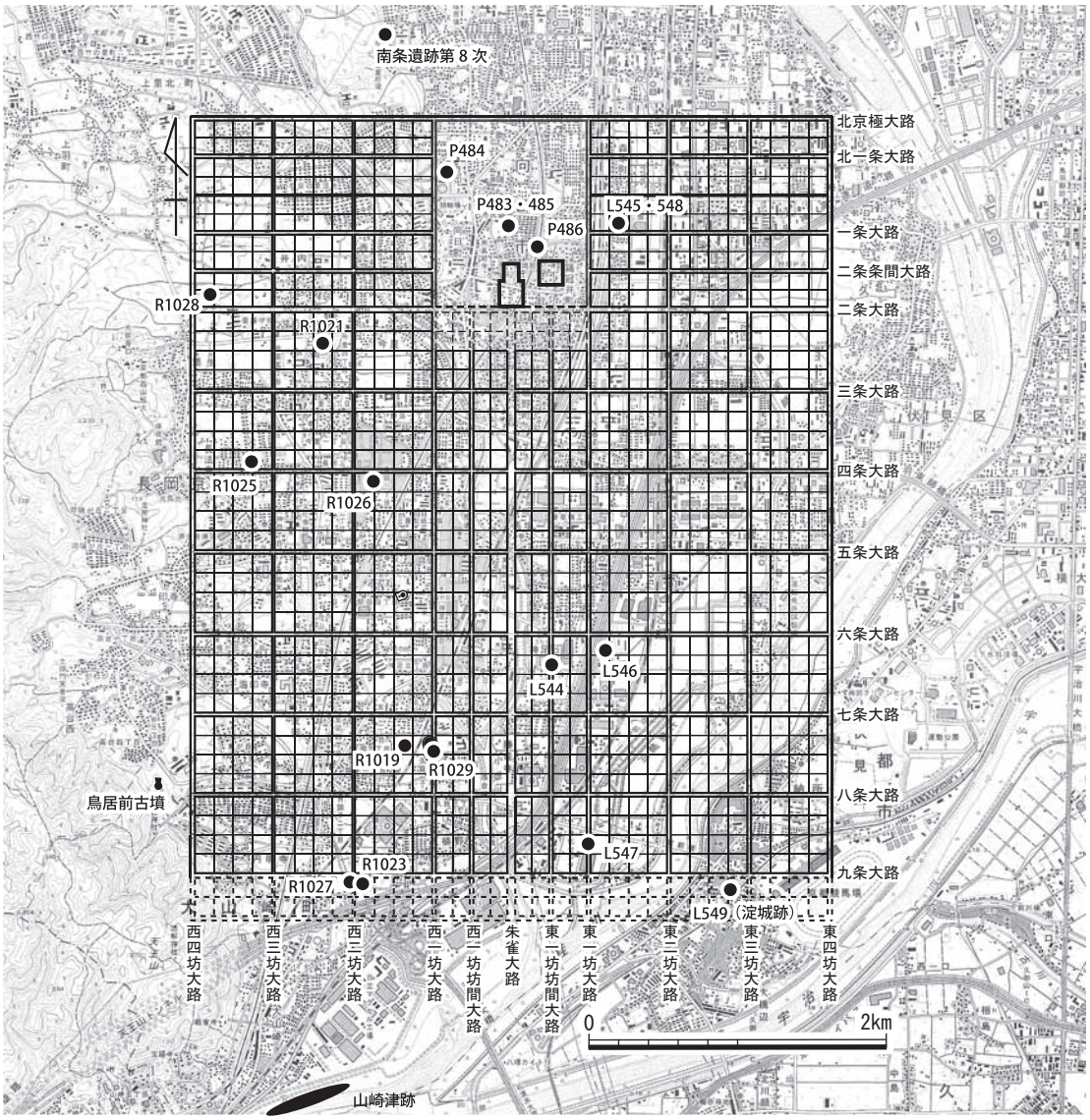
山口　均「岸ノ下遺跡・殿長遺跡の評価について（弥生時代・古墳時代)」『向日市埋蔵文化財調査報告書第46集 （財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会　1998

長岡京跡調査だより・112

長岡京跡発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月１回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成23年６月から９月の例会では、宮域４件、左京域６件、右京域８件、京域外４件の合計22件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。

宮域

宮跡第483・485次調査（向日市向日町）では、礎石建物１棟、足場遺構、溝が検出された。礎石建物は、南北棟の東西両面庇付礎石建物で、身舎は桁行14～15尺、梁間10尺、庇の出は東側が10



調査地位置図（１/50,000）
（向日市文化財事務所・（財）向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図）
調査地はＰが宮域、Ｒが右京域、Ｌが左京域を示し、数字は次数を示す。

尺、西側が９尺である。礎石は残っていなかったが、根石掘形は一辺約1.7m四方と規模が大きいものであった。この建物については、その規模・構造から長岡京において大極殿・後殿に次ぐ位置を占めるが、その性格については周辺の調査成果とあわせて検討していく必要がある。

左京域

左京第545次調査（向日市森本町）では長岡京の東二坊坊間小路の両側溝が検出された。溝はいずれも幅1.8m、深さ0.3mで、道路幅は９ｍである。溝からは須恵器、土師器、製塩土器、瓦類などが多量に出土している。

右京域

右京第1019次調査（長岡京市調子）では、長岡京期の掘立柱建物跡１棟と建物を区画する溝３条が見つかったほか、戦国期の堀、平安時代の井戸、江戸時代の掘立柱建物跡、柵列、井戸、土管埋納坑等が検出された。長岡京期の掘立柱建物は南北２間×東西５間の東西棟建物で、南に庇が付く。建物内部には、須恵器の大甕を据え付けた穴が東西８列×南北３列、総数23か所検出された。酒などの醸造を行っていた施設と考えられる。また、戦国期の堀は、幅４ｍ・深さ２ｍの南北方向の堀で、総延長49m分が確認された。堀からは少量ではあるが16世紀頃の茶釜と白磁片が出土している。山崎の合戦（1582年）の際に明智光秀が近くの恵解山古墳を城として利用しており、今回見つかった堀はその城に関連する施設と考えられている。

右京第1023次調査（大山崎町円明寺）では、長岡京期の掘立柱建物跡２棟や溝３条、古墳時代の竪穴式住居跡や自然流路、弥生時代の竪穴式住居跡が検出された。長岡京期の建物のうち１棟は東西３間×南北２間以上の南北棟建物で、柱の掘形は一辺0.7～１ｍである。溝は、幅3.4～４ｍ、深さ0.3mの南北方向溝で多量の土師器や須恵器が出土した。土師器には高杯が多く含まれる。長岡京の京域が調査地付近まで整備されていたことを物語っている。弥生時代の竪穴式住居跡は、平面形が八角形で対角線の長さは8.5mである。床面から多量の焼土や炭が出土しており、焼失住居と考えられる。また、ベッド状遺構をもつ。

右京第1027次調査（大山崎町円明寺）では、右京第977次調査で検出された柵列ＳＡ36の延長部分を確認した。

京域外

勝持寺旧境内遺跡（京都市西京区）では、昨年度に阿弥陀坊で確認された室町時代の石垣の背面を調査し、石垣の築造工程が明らかになった。周辺の調査でも同時期と考えられる石垣や建物跡・土坑などが検出されている。

鳥居前古墳周辺試掘・確認調査（大山崎町円明寺）では、埴輪片が出土したものの遺構は確認されなかった。

（松尾史子）

普及啓発事業（７月～10月）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業（体験学習）・関西考古学の日関連事業等の普及啓発活動を行っています。

埋蔵文化財セミナー

第119回埋蔵文化財セミナーは、平成23年８月20日（土）に、向日市民会館で実施しました。

当調査研究センターの報告は、筒井崇史調査員の「木津川市上狛北遺跡の発掘調査」と題し、100mを超える１本の直線溝とそれに隣接して見つかった建物跡や土坑などを紹介し、豊富な出土文字資料の考察も混え、遺跡の性格を検討しました。続いて（財）向日市埋蔵文化財センターの松崎俊郎調査係長により「長岡宮跡第481次の発掘調査」と題して、長岡宮「西宮」の可能性が指摘できる複廊の調査成果について発表がありました。ほかの都城中枢部との比較検討をも通じて、「内裏」の施設に匹敵する遺構の発見と位置づけられました。また、当調査研究センター小池寛課長補佐からは「重要文化財建造物保存修理事業に伴う発掘調査－清水寺境内馬駐・萬福寺松隠堂庫裏・教王護国寺（東寺）東大門」と題して、その発掘調査の成果について報告がありました。当日は、128名の参加を得て盛況の内に終えることができました。

第119回埋蔵文化財セミナー（於：向日市）

展覧会

第26回小さな展覧会－平成21・22年度京都府内遺跡発掘調査成果展－を、向日市文化資料館のラウンジおよび２階研修室で開催しました。開催期間は、平成23年8月13日から8月28日まで開館延べ14日間、1,434名の方々に観覧していただきました。

第26回小さな展覧会（於：向日市）

今回の展覧会では、平成21・22年度に発掘調査、整理作業が実施された遺跡を中心に、その成果を速報展示するとともに、上狛北遺跡で出土した木簡を始めとする文字資料を一同に展示する特設コーナー「上狛北遺跡」、府内各地の古墳時代の調査成果を紹介し、貴重な遺物を展示する「古墳時代のムラと墓」の企画展示を設けました。なお、８月20日（土）・21日（日）には、

上狛北遺跡出土の木簡の実物を展示し、見学者の注目を集めました。

三ノ宮東城跡現地説明会（於：京丹波町）

現地説明会

９月17日（土）　長岡京跡右京第1023次・松田遺跡（大山崎町）で開催しました。奈良時代末～平安時代初頭の掘立柱建物跡と溝、古墳時代後期の竪穴式住居跡、弥生時代後期の大型の竪穴式住居跡などが検出され、85名の参加がありました。

10月16日（日）　三ノ宮東城跡（京丹波町）で開催しました。室町時代後期の山城全体を調査するという大規模な調査です。丘陵頂部から数段にわたって造成された曲輪には、土塁や石垣などが施され、建物跡も見つかりました（詳細は本号参照）。134名の参加を得て盛況に終えることができました。

関西考古学の日関連事業

関西考古学の日関連事業として９月～11月に４回にわたり、「京都府内重要遺跡再考！」と題して考古学講座を当調査研究センター研修室にて実施しました。９月24日（土）は筒井崇史調査員を講師に「亀岡国分古墳群再考」と題した講義が実施され、23名が受講しました。続く10月22日（土）には、小池寛課長補佐「京都市平安京跡左獄跡再考」、村田調査員「京丹後市俵野廃寺再考」の二本の講義が行われ、19名の参加がありました。

滋京阪連携歴史講演会 2011 －祈る・作る・運ぶの考古学－京都会場

東日本大震災復興支援募金のための歴史講演会を、近畿の埋文法人（京都・大阪・滋賀の２府１県）で連携して、会場をそれぞれの府県に移して３回シリーズで実施しています。その第３回目にあたる「京都会場」は、平成23年７月３日（日）に、（財）長岡京市埋蔵文化財センターの共催、歴史街道推進協議会の後援を得て、長岡京市産業文化会館で実施しました。

京都では「運ぶの考古学」をテーマとして、堀真人「発掘！琵琶湖をめぐる古代物流の実像－律令国家が目指したもの－」（滋賀県文化財保護協会）、信田真美世「ムラの暮らしを支えるもの－地域社会からみた中世の流通－」（大阪府文化財センター）、肥後弘幸「船と港の考古学－日本海を渡る人びと－」（京都府教育委員会）の３題の講演がありました。

当日は、府内のみならず広く遠方からの参加者もあり、102名の入場者を得ました。集まった72,440円の募金は、義援金として日本赤十字社を通して全額、震災の被災者・地域の復興のためにお預けしました。

（伊賀高弘）

センターの動向

（平成 23 年 7 月～ 10 月）

月	日	事　　項
7	1	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議（於:京都市）水谷壽克調査第 1・2 課長、小池寛調査第 2 課課長補佐出席
	3	滋京阪連携歴史講演会 2011「運ぶの考古学」（於:長岡京市産業文化会館、参加者 102 名）
	5	臨時職員人権研修（於：当調査研究センター）職員 9 名・臨時職員 23 名参加
	8	全国埋蔵文化財法人連絡協議会第 1 回近畿地区 OA 委員会（於：奈良県）　松尾史子調査第 1 課調査員出席
	11	中尾芳治理事上狛北遺跡出土木簡の調査指導 椿井遺跡（木津川市）発掘調査開始
	13	井上満郎理事美濃山廃寺（新名神：八幡市）現地調査指導 人権大学講座（於：京都市）古川匠調査員受講
	19	上狛北遺跡出土木簡の検討会（於:奈良県）石井清司調査第 2 課主幹、伊野近富次席総括、筒井崇史調査員、松尾史子調査員派遣
	20	人権大学講座 1（於：京都市）岩松保調査第 2 課係長受講 上原真人理事上狛北遺跡出土木簡の調査指導
	22	京都府視覚障害者社会教育指導者研修会（於：京都市）岸岡貴英調査第 2 課課長補佐受講
	25	上田正昭理事長上狛北遺跡出土木簡の調査指導 椋ノ木遺跡（精華町）発掘調査開始
	26	京都府中世城館跡調査委員会（於：京都市）水谷壽克調査第 1・2 課長出席
	27	長岡京連絡協議会。上狛北遺跡出土木簡等記者発表（於：当センター）
8	1	上原真人理事、村田修三元大阪大学教授、千田嘉博奈良大学教授三ノ宮東城跡（京丹波町）現地指導。長岡京跡右京第 1027 次・松田遺跡（大山崎町）発掘調査開始
	2	中尾芳治理事長岡京跡右京第 1023 次・松田遺跡（大山崎町）現地指導
	4	都出比呂志理事長岡京跡右京第 1023 次・松田遺跡（大山崎町）現地指導
	5	人権大学講座（於：京都市）　筒井崇史調査員受講
	8	人権問題研修（於：京都市）安田正人副局長、石井清司調査第 2 課主幹、杉江昌乃総務課課長補佐、岸岡貴英調査第 1 課課長補佐出席。美濃山廃寺（府道：八幡市）発掘調査開始
	10	増田富士雄理事美濃山廃寺（新名神：八幡市）現地指導
	13	第 26 回小さな展覧会（於：向日市文化資料館）開催（～ 8/28）
	17	野条遺跡（南丹市）発掘調査開始。長岡京跡左京 547 次（京都市）発掘調査開始
	19	椿井遺跡（木津川市）発掘調査終了（7 /11 ～）
	20	第 119 回埋蔵文化財セミナー（於：向日市民会館、参加者 128 名）
	23	平成 23 年度役員等協議会（於：当センター）芦田富男、奥原恒興、宮野文穂各評議員、上田正昭理事長、小池久常務理事、中尾芳治、石野博信、井上満郎、都出比呂志、中谷雅治、増田富士雄、上原真人、磯野浩光各理事、清水浩平、橋本幸三各監事出席
	24	長岡京連絡協議会（於：当センター）
	28	第 26 回小さな展覧会閉会（13 ～、入館者総計 1,434 名）
	29	人権問題研修（於：京都市）岩松保調査第 2 課係長受講

30　人権問題研修（於：京都市）水谷壽克調査第１・２課課長、小池寛調査第２課課長補佐、今村正寿総務課総務係長受講

9　7　平成 23 年度第１回埋蔵文化財担当職員等講習会（於：新潟県、～８日）
石井清司調査第２課主幹、岸岡貴英調査第１課課長補佐参加

10　ふるさとミュージアム山城文化財連続講座「京都発掘だより 2011」石井清司調査第２課主幹講師派遣

12　石野博信理事長岡京跡右京第 1023 次・松田遺跡（大山崎町）現地指導

13　人権教育者研修会・人権教育講座（於：亀岡市）高野陽子調査第２課調査員受講

16　人権大学講座（於：京都市）田中彰調査第１課主任調査員受講。平成 23 年度市町（組合）記念物保護行政担当者会議（於：京都市）岸岡貴英調査第１課課長補佐、村田和弘調査第２課調査員出席

17　長岡京跡右京第 1023 次・松田遺跡（大山崎町）現地説明会（参加者 85 名）

22　興戸遺跡（京田辺市）関係者説明会

24　「京都府内重要遺跡再考！」考古学講座第１回（於：当センター）「亀岡国分古墳群再考」講師：筒井崇史調査員（参加者：23 名）。

28　長岡京連絡協議会。平成 23 年度第１回人権教育行政担当者等研究協議会（於：乙訓教育局）小池寛調査第２課課長補佐出席

10　3　美濃山廃寺（市：八幡市）発掘調査開始

5　人権大学講座（於：京都市）中川和哉調査第２課主任調査員受講。応急手当講習（於：向日市）田中彰調査第１課主任調査員、伊野近富調査第２課次席総括、岡﨑研一専門調査員受講

6　長岡京跡右京第 1027 次・松田遺跡（大山崎町）発掘調査終了（８/１～）。興戸遺跡発掘調査終了（６/20 ～）

12　人権大学講座（於：京都市）鍋田幸世総務課総務係主事受講

16　三ノ宮東城跡（京丹波町）現地説明会（参加者 134 名）

18　清水寺境内（京都市）発掘調査開始

21　人権大学講座（於：京都市）水谷壽克調査第１・２課長受講。成相寺旧境内・難波野遺跡発掘調査委員会（於：丹後郷土資料館）石井清司調査第２課主幹出席

22　「京都府内重要遺跡再考！」考古学講座第２回（於：当調査研究センター）「京都市平安京跡左獄跡再考」講師：小池寛調査第２課課長補佐、「京丹後市俵野廃寺再考」講師：村田和弘調査第２課調査員

24　長岡京跡右京第 1031 次・開田遺跡・開田古墳群（長岡京市）発掘調査開始

25　平成 23 年度外郭団体等実地調査（於：当調査研究センター）

26　長岡京連絡協議会（於：当調査研究センター）
平成 23 年度企業内人権啓発研修会（於：京都市）今村正寿総務課総務係長参加

27　平成 23 年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（於：福島県、～ 28 日）　水谷壽克調査第１・２課長、杉江昌乃総務課課長補佐参加
人権大学講座（於：京都市）石井清司調査第２課主幹受講
長岡京跡左京第 547 次（京都市）発掘調査終了（８/17 ～）

編集後記

情報第116号をお届けします。

今年は秋の到来が例年になく遅く、この間に季節が急激に進行しました。

当調査研究センターは、公益財団法人に移行して９か月を経過しようとしていますが、調査研究に係る業務も順調に進捗しています。

さて、今号では前号に引き続き、「文字資料」の出土で脚光を浴びた上狛北遺跡の整理作業を通じた恭仁京の造営にかかる論考、および、非常にリアルに作られた人面付き土器の系譜を多角的に捉えた論考のそれぞれ続編を収録し、ここに完結しました。また、中世の山城の全面調査を実施し、その構造の全貌が明らかとなって注目を集めた三ノ宮東城跡について、詳細な図面を掲載して紹介しています。さらに、「乙訓地域の首長墓群の歴史的位置付けに関する検討会」を受けて、古墳を営んだ集団の集落分布について、研究ノートの連載を始めました。

（編集担当　伊賀）

京都府埋蔵文化財情報　第116号
平成23年12月31日
発行　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel　(075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER